
イバラヒメ

あべかわきなこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イバラヒメ

【Nコード】

N8500T

【作者名】

あべかわきなこ

【あらすじ】

気持ちを新たに高校生活をスタートさせた久城標の前に現れたのは、鬼の腕を持つ少女。口を開けば罵詈雑言しか出てこない彼女に巻き込まれて行き着く先は？ 終わりの見えない鬼退治スクールライフ。

ブローグ

真っ暗な場所。

そこがどこかも、俺には分からなかった。
意識が、朦朧としているから。

「コレ、やっちゃっていいの？」
女の声がする。

まるで虫を殺すかのような言い振りに、抵抗したくても叶わない。
すると誰かが歩み寄ってきた。
そいつはゆっくりと俺の前にしゃがみ込み、そして言う。

「オヤスミ」

次の瞬間、俺は胸のど真ん中を撃ち抜かれた。

「……っな、んで……」
恨み言を言う前に、身体が倒れる。

それきり俺の意識は、プツリと切れた。

E 2：鬼バス

朝は嫌いだ。

眠いし、でも二度寝したら遅刻しそうになってバタバタするから嫌いだっただ。

眠気を押し殺して学校に来たっていうのに、欠伸してるだけで先生に怒られるし。

そんな日の昼休み。

「久城って低血圧？　いつつもねむそーにしてんな？」

隣の席の脇谷にそんなことを言われた。

「血圧なんて測ったことねーよ」

「じゃあ夜更かしでもしてんのか？　ん？」

「たたくやらしー目で見えるなっつーの。」

まあ、1年ほど前までは夜の街を徘徊してちよつと喧嘩まがいなことしたりしたけど。

今じゃ善良な普通の高校生って奴だよ。

平和で健全な学生生活を謳歌してるんだよ。

……枯れてんなあ、俺。

「お、そうだそうだ。お前今夜、晩飯いけるか？」

思い出したように脇谷が尋ねてくる。

「ん？　何かあんのか？」

「緑ヶ丘女子との合コン。ファミレスで」

……なん、だと！？

いや、ちよつと待て。だって俺たちまだピツカピツカの高1だぞ？

合コンっていうとあれだ、お付き合いを前提にした出会いが待ってるそんなオトナな場所だろ？

……こんなに早くそんな話が来るとは思わなかった！

「行く」

ひと言で返すと、脇谷は「そう言うと思った」と笑った。

「うちのクラスの女子、全体的にレベルは高いけどガード堅そうな子ばっかだからなあ」

脇谷のその言葉には同意する。

うちの学校は元男子校なせいもあって、女子の数がとにかく少ない。

どれくらい少ないかというとうちのクラスの男女比率が3対1なほど少ない。

脇谷の言ったとおり、うちのクラスの女子10名は結構可愛かったり綺麗だったりするんだが、男の数が多いせいか萎縮してしまっている感があって、滅多に男子に話しかけてこない。

それこそクラスが男子と女子で2分されているような感じだ。

「じゃあ俺他のメンバーにも確認とってくるわー」

脇谷は席を立てて隣のクラスへ向かったようだった。

……合コンかあ。

緑ヶ丘女子っていうと制服がブレザーに赤いリボンで結構可愛いとこだよな。

どんな子が来るかなあ。

俺、ちゃんと喋れるかなあ。

結構人見知りだからなあ。

そんなアホなことをぼけっと考えていると、ふとある視線とぶつ

かった。

「……………」

教室の隅の席。

そこに座っているのはいかにも大人しそうなセミロングの女子。
みずはしの
瑞葉茨乃だ。

かなりの無口らしく、女子とも喋っているところをあまり見たことがない。

勿論のこと、俺も言葉を交わしたことはない。

けど顔は、……実はクラスで1番好みだったりする。

日本人的な素朴な顔立ちで、でも目はぱっちり大きくて、それでいてちよつとアンニュイな、大人びた感じがイイ。

でも孤高なタイプっぽいからきつと男馴れしてなくて、喋りかけてみたら案外真っ赤になったりして……ふふふ。

けど友達に俺の好みについて語ると『じじくさい』ってよく言われる。

ふい、と、彼女のほうから視線が逸らされた。

どうやらたまたま目が合っちまっただけらしい。

でも、ちよつとだけラッキー。

そんな幸運と放課後の合コンへの期待からか、俺は知らず鼻歌を歌っていた。

* * *

放課後、俺は脇谷以下3名と共に道路沿いのファミレスにやって来た。

脇谷の姉ちゃんが緑ヶ丘女子高のOGらしく、その伝手で今回の合コンが企画されたのだとか。

……それにしても。

「待ち合わせ時間、もう過ぎてるよな？」

俺が思っていたことを隣のクラスの名も知らない奴がこぼした。

「部活終わってから直接来るって言ってたからさ、もしかしてバスが遅れてるんじゃないかな？」

脇谷が手持ち無沙汰そうにメニューを見ながら言う。

「このまま向こうが来なかったらどうするよー」

その場合このムサイメンバーで仲良く夕飯だろうな、なんて心の中ではやいて

「ちょっとバス停見てくるわ」

ソファアの端に座っていた俺は立ち上がった。

「お、わりいな」

「いつてらー」

そんな台詞を背中を受けて、外に出る。

日はもう完全に落ちていて、空の色が夜のそれに変わりきった頃だった。

この辺りはぶっちゃけ田舎で、少し遠くを見渡すと山が見えたりする。

そんな小さな町なわけで、車通りも街灯も少ない。

ファミレスの向かいにあるコンビニの煌々とした明かりを頼りに最寄のバス停へと足を向ける。

いかにも田舎ちつくな格好をした錆びたバスの時刻表をじつと眺めていると、向こうのほうからバスのヘッドライトが光ってきた。

「あれに乗ってるかなー」

思わず独り言を呟きつつ、首を伸ばしてみる。

バスが目の前で停車した。

前側の扉が開く。

けど、誰も降りてこない。

……乗ってないのか。

俺は運転手に「乗らないよ」的な合図をしようとして、息を呑んだ。

「……!？」

運転席に座っていたのは、おっさんでもお兄さんでも、はたまたおばさんでもお姉さんでもなく、鬼。

身体が真っ黒で、頭に角が2本生えてて、口からは牙っぽいものが見えてるあれを鬼と言わずしてなんと言う!？

「うわんツ!？」

俺はソレから目をそむけるようにして逃げ出そうとした。
のだが。

ガシリ、と。

「なにになになに!？」

脚が動かない。

というより首根っこが何かに引っかかって動けない!?

半泣きで後ろを振り返ると

「ギャーーーーー!?!」

運転席に座るその鬼が、ありえないくらい腕を伸ばして俺の制服の襟を掴んでいた。

「放せよバカーーーーー!!」

ばたばたともがいてもそれは外れず、むしろ

「ぎゃ!?!」

グイッとありえない力で後ろに引き寄せられて俺の身体は宙に浮いた。

「だっ」

バスのステップ部分に引っ張り込まれたかと思うと、目の前でバスのドアが閉まる。

「ちよつとーーーーー!?!」

そのままバスは走り出した。

ら、拉致!?! 拉致られた!?!

バスの中を見回すと、緑ヶ丘の制服を着た女子数名と夫婦らしき老人2人が客として乗っていた。

が、皆ぱたりと眠っている。

気絶したのかそれとも眠らされてるのか、とりあえずこの状態は、有り得ない。

けれど振り返るのが怖くて動けなかった。

このままこのバスはどこに行くのか。

山の中にある鬼の巣にでも連れて行かれて皆食われちゃうのか。

一瞬、鬼に食われる自分を想像してしまつて、鳥肌が立った。

「~~~~~」

俺は意を決して立ち上がる。

「止めるちくしょー!!」

悠々とバスを運転している鬼に殴りかかった。

が、目視するのが辛かったので半眼で殴りかかったのがまずかったのか、俺の拳は狙いを大きく外れた。

そして。

「っ」

今度は前から、ガシリと首を掴まれた。

ぎりぎりと閉まっていく気道。

息が、出来なくなる。

血の気すら、なくなってきた。

まずい、このままじゃ、ほんとに、死ぬ。

刹那。

「!」

バスが急停車して、その勢いで首から奴の手が離れた。

「あっ!? げふっ」

思い切り頭をスロープにぶつけ、ステップに身体が転がる。

ちょうどどうまい具合にバスの扉が開いて、俺の身体はバスの外まで転げ落ちた。

「……………た、なんだよ…………」

軽く脳震盪気味の頭を押さえつつ、俺は前方を見た。

眩しいくらいのヘッドライトに照らされる人影。

道路の真ん中に、そいつは立っていた。

「……………」

パーカー姿の、細身のシルエット。

あれは、女？

けど次の瞬間、俺は自分の目を疑った。

「！？」

その女の腕が、ガパリと大きく変化したのだ。

巨大化しただけじゃない。

あれはもう、人間の腕じゃなかった。

異形。

そう、それこそ鬼の腕のような。

その大きな腕はぐんと伸びたかと思うとバスのフロントガラスを突き破り、運転席にいた鬼の頭を掴んでバスから引きずりだした。

女はそのまま鬼を地面に叩きつけ、鬼はそのまま動かなくなった。

「……す、げ……」

圧倒的な力を前に、俺はただ呆然としていた。

するとすぐに、女の腕は通常のそれに戻った。

そして彼女が、こちらを向こうとしたそのとき。

「！？」

バスの上からまた別の影が降ってきて、彼女にまわりついた。

「まだいたのか！？」

俺は慌てて彼女に駆け寄る。

少し小ぶりのその鬼は彼女の腕に噛み付いていて、振り回しても離れないようだった。

今度こそッ！！

「腕、こっちに出せ！！」

俺はそう彼女に言い放ち、しっかりと両目を開いて、その子鬼の顔を殴った。

「ーーーーッ」

金切り声を上げて鬼は吹っ飛び、そのまま地面に落下。そして、それきり動かなくなった。

ぼたぼたと、何かが滴るような音が聞こえて気がついた。女の腕から血が流れている。

「あんた、大丈夫か！？」

そのとき、俺は初めてそいつの顔をちゃんと見た。そして、目を見張った。

「え……………！？」

そこにいたのは、見覚えのある顔。さらりとしたセミロングの髪の毛、素朴系和風美人。

「みず、は……………！？」

クラスメイトの瑞葉茨乃、だった。

彼女は俺の顔を見て、大げさに、面倒くさそうに溜め息をついた。
「……………最悪」

………… サイアク？

「やな予感はしてたんだけど、こつもドンピシャだとむしろ萎える
っつーか。まあ、仕方ないか」

………… 『萎えるっつーか』 って。

こつちが萎えるわ！！

「お前ほんとに瑞葉か！？」

俺は思わずそう叫んだ。

だって、だって俺の中の彼女のイメージとしては無口で知的で超
純朴なお嬢さんだったんだぞ！？

なのに、なのに

「耳元で喚くな、ボケ」

なんでこんな口悪いんだよーーーー！！？

E 2：鬼バス（後書き）

約1年ぶりの新作です。

更新速度は遅いと思いますが、どうぞよろしくお願いします。

E 2 - 2 : 異形ノ腕持ツ茨姫

バスの運転手がなぜか鬼で。

その鬼を退治したのがなぜかクラスメイトの瑞葉で。
その瑞葉はなぜかこんな感じに口が悪い。

「……俺もしかして夢とか見てるんじゃないね？」

ちよつとばかり頬をつねってみたが、やっぱり痛い。

「何度も馬鹿やってんじゃないよ、馬鹿」

瑞葉はそんな暴言を吐きながら、どこからともなく包帯らしきものを取り出して慣れた手つきで腕に巻き始めた。
と、いうか。

「ちよ、あの鬼いなくなつてんぞ!？」

さっきまで地面に突っ伏していたはずの鬼2匹の姿がない。

「消えたんだろ。表に出てきても所詮、心鬼^{じんき}だ」

瑞葉はこちらに目もくれずただそう言った。

「は？ じんき？」

「説明めんどい。パス」

なんじゃそりゃ!？」

「私としてはここでハイ、サヨナラといきたいところなんだが」

こつちだつてもう帰つて寝てえよ。

そして全てを忘れたい。

「まだ終わりじゃないんだよな、今日は」

……は？

と、俺が首を傾げたと同時に、ネクタイごとのすごい力で引き寄せられた。

「ぐふっ!？」

ありえない、怪力だった。
嘘じゃない。

細い腕でネクタイを掴まれただけなのに、俺はそれだけで完全に拘束されてしまっていた。

けど。

なによりも、俺は彼女のその眼に釘付けになっていた。

澄んだ闇。

野生的で、それでいて怠惰で、でもなぜか綺麗な漆黒。

緊張すら気まずさに変わる至近距離で、彼女は俺に言い放つ。

「ちょっとツラ貸せ、久城」

夜の繁華街を、彼女はつかつかと歩いていく。

ところで、瑞葉はいつもの地味な制服姿じゃない。

デニム地のミニパンツに紺色の薄いパーカーを羽織った、アクテイブな私服姿だ。

が。

ミニはミニでも、細過ぎる感じがあって色気もへったくれもない。
俺はそんな彼女の背中（というか尻）をしぶしぶ追いかけていた。
「なあ、どこ行くんだよ」

「アパート」

「!？」

え、アパートって、誰の!？

この状況からしてまさか瑞葉の!？

いや、何それという展開！？

俺まだ女子の部屋に足を踏み入れたことすらな

「おいクソ馬鹿。変な妄想しなかったか」

射るように睨まれて思わず足がすくんだ。

「してません」

「嘘つけ、タコ」

……さっきから聞いてりや人のことボケだのクソだのタコだのと！
一体お前は何様だツ！！

「大体お前は昼間っからアホ面しすぎなんだよ。合コンだかなんだか知んねーけどフラフラしてっから巻き込まれるんだ」

……ほんと、何様なんだろう。

まるで俺のことを見ていたかのような口ぶりだ。

「なあ、お前……」

それを尋ねようとしたら、急に彼女が立ち止まってタイミングを逃した。

「着いた」

いつの間にか辿り着いたのは、繁華街から2本ほど奥の道に入っ
たところにあるちょっとボロい感じのアパート。

全部で8部屋くらいしかない、小さな建物だ。

もう夜だというのにベランダに洗濯物が干しっぱなしの部屋もある。

あ、しかもあれよく見たらブラジャ……

「おいエロ坊主、とつとつについて来い」

「俺エロくないもん！！」

そんななけなしの意地すら鼻で笑われて、俺はとぼとぼとアパートの敷地に足を踏み入れた。
すると。

「!？」

途端、アパートの各部屋が音を立てて一斉に開いた。

思わず彼女の後ろに隠れる。

「ちょ、ななななんだよこれ！ 心霊現象か!？」

「隠れんなヘタレ、よく見ろ」

そう言われて、彼女の肩越しにそつと扉のほうを見た。
すると、そこにいたのは。

「やっぱ鬼じゃねえかよ!!」

まるでゲームに出てくるゾンビのように、各部屋から鬼がわらわらと出てきた。

「あいつらも心鬼だ。目一杯殴れば消える。つーことで後は任せた」
瑞葉はそう言って、さつと横に退避した。

「ちょ!？」

瑞葉という盾がなくなった途端、鬼の視線は一気に俺に集中した。
した。

「おおお前、これ全部俺にやらせる気か!？ ふざけんなッ!!」
いつの間にやら隣の家のブロック塀の上に足を組んで座っていやがる瑞葉に叫ぶ。

「るせーな。こっちは制限つきなんだよ」

「は!？」

こっちが訊き返しても彼女は何も語らない。
が

「お前、喧嘩に強いのが取り柄なんだろう？」
なぜか彼女はそう言った。

「え……」

なんで俺が喧嘩に強いなんてこと、あいつが知ってるんだ？

「っと思ってる間に来たあッ」

1階の部屋から出てきた鬼が俺の元に飛び掛ってくる。

けど、なんだろう。

さっきのバスに乗ってた奴より動きがとろい。

思い切って一発殴ると、そいつはすぐに霧散した。

「へ？」

はつきり言って、手ごたえない。

「ひゅー、やるー」

全くもって感情の籠っていない棒読みの歓声が隣から飛んでくる。けどそんな超適当な野次すら、今の俺を調子に乗らせるには十分だった。

「はっはっは！ 神木町のオオカミとは俺のことさ！ー」

調子に乗った俺は次々と鬼どもを殴っていった。

数分後。

「はっはっは……。どうだ、俺、強いだろう……」

久しぶりの乱舞に息が上がってしまった。

「っーかなんだよ『神木町のオオカミ』って。ドウテイのくせして生意気名乗ってんじゃねえっっーの」

「ど………！？」

「さて、トリにいくか」

瑞葉はそう言ってアパートの階段を登っていく。

「ちょっと待て！ トリつてなんだよ！？」
あとなんで俺が童貞だって知ってるんだよ！？」

アパートの2階に上がってから気がついた。

1番奥の部屋だけ、まだ扉が開いていないのだ。

「……なんだよ、あの部屋」

「あそこがバスの運転手の部屋なんだよ。今頃本人とそのガキは布団の中で夢でも見てんだろうが……」

瑞葉はそう言って、ドアノブに手をかけた。

「元凶が残ってりゃ、また同じことの繰り返しだかな」

彼女がドアを引いた途端、勢いよく何かが部屋から飛び出した。

「うおおっ！？」

次の瞬間、感じたのは熱気。

「これが今回の元凶ってわけだ」

宙に浮いているのは、炎に包まれた『何か』。

いや、これもよく見たら鬼だ。

「火鬼、か。未練の念に惹かれたか」

瑞葉はそうこぼしたかと思うと、右腕を宙に伸ばした。

すると、あのときと同じように、彼女の腕は異形のそれへと変化する。

そしてその腕が真っ赤な鬼へと伸ばされたそのとき。

「……」

鬼はその腕から逃れるように俺のほうへ飛んできた。

「うッ!？」

鬼が俺の首にまわりつく。

「……ッ!！」

首が、またしても絞まっている。

しかも今回は熱い。火傷しそうだ。

「久城!！」

このとき初めて切羽詰った瑞葉の声を聞いた気がする。

……ひどい奴だと思ったけど、一応は人の血が通ってるんだな……。

「お前今なんか失礼なこと考えなかったかッ!？」

瑞葉はそう叫びつつ、腕をこちらに伸ばした。

水音が聞こえる。

瑞葉の異形の腕が、水を纏っているのだ。

それはまるで蛇のようにその腕に絡んでいて、そして俺の首にまとわりついていた赤鬼を取り込んだ。

「……………ッ!！」

鬼の悲鳴だろうか。

なんとも言えない声が聞こえたかと思うと、俺の首から熱がさっぱり消えた。

と同時に狭まっていた気道が元に戻って肺に一気に空気が入る。

「……ッ……ッ……ッ」

……今日は2度も死にかけた……。

「還れ、餓鬼が」

瑞葉がそうこぼした途端、その手の中で炎を纏った鬼は蒸発するように消えた。

「……………」

嘘みたいに訪れる静寂。

彼女の腕が、また人間のそれにすつと戻った。

戻ったかと思うと、彼女は扉が開いたままになっていたアパートの一室へと踏み込んだ。

「え！？　ちよ、そこ人ん家だろ！？」

慌てて止めようと部屋を覗き込むと。

「…………え？」

明かりの灯っていない真っ暗な部屋に、不自然な光があった。
部屋の奥。

床に敷かれた布団の上に、男と幼い少年が横たわってすやすやと寝息を立てている。どうやら親子らしい。

そしてその枕元。

そこに座っているのは、白い光を放つ女。

悲しげな、それでいて優しい瞳で、眠る親子を見守っていた。

「もういいだろ。あんたがここにいとまた別の鬼が呼び寄せられる」

瑞葉はその女にそう言った。

すると彼女は、深く頭を下げた。

『ご迷惑を、お掛けしました』

薄い声。

肉声じゃ、ない。

これは……………

『退治してくれてありがとう。ちゃんと、行きます』

眠る2人に口付けを落としてから、女は光の粉となって消えた。

「……………さっきのつて、」

「霊に決まってるんだろ」

「やっぱり!？」

「詳しくは知らねーけど、夫と子供を残して先に逝っちゃったみたいだな。でもこの2人が心配でここに留まってた、と」

「で、なんでそれがあの鬼と関係あるんだよ!？」

「ちったあ自分で考える。いちいち説明すんのタルいんだよ」

「巻き込んだくせに説明くらいしろよ!」

「勝手に巻き込まれたのはお前だろうが」

彼女はそう言って踵を返し、つかつかとアパートの階段を降りていく。

「おい瑞葉!」

その背中を追いかけて、階段を降りきると。

「……………どうせ今説明しても、お前は明日忘れるんだ」

彼女はぼつりと、そこぼした。

「は?」

その言葉の意味が分からなくて、首をかしげると。

「小夜^{サヨ}、仕事だ」

その一声と共に、突然俺の目の前に白い何かが現れた。

「あーめんど。雑用で呼び出さないでくれる?」

白い何か。

それは女だった。

薄く青みがかった銀の髪に、蛇のような金色の眼。

病的なほど白い肌に、白が基調のヘンテコな着物を纏っていて、
どうにも人ならざる者の香りがぶんぶんする。

「ていうかまたこのガキ? あんたも相当ついてないわね」

俺に言っているのか瑞葉に言っているのか、ともかくも女は皮肉
げにそう一笑したかと思うと。

「ばあーい」

白い人差し指を銃口のように俺に向けて、何かを放った。

「!?!」

胸に、身体に、衝撃が走る。

謎の光に打ちぬかれた瞬間、俺の身体は一切言うことを効かなくな
った。

「……ん、だ、これ」

そのまま、倒れる身体。

視界が狭まっていく。

意識が飛ぶその寸前に、瑞葉が近づいてくるのが分かった。

「オヤスミ」

……その言葉、前にも、聞いた……?

E 2 - 2 : 異形ノ腕持ツ茨姫（後書き）

ヒロインがものくさなためいろんなことを説明していませんが後々ちゃんと説明が入りますので今は意味が分からなくても大丈夫です。すみません不親切で・・・。

読んでくださっている数少ない読者の方々、ありがとうございます。

E 3：放課後デンジャー

朝は嫌いだ。

とりあえず眠い。異様に眠い。

けど学校はもうサボりませんと中学時代の恩師に誓ってしまった手前、いかに眠くても学校には行かなくちゃいけない。

重たい身体を引きずりながら、教室に入る。

チャイムが鳴るギリギリ前だったから、他のメンツは皆すでに席に着いていた。

「おー久城。生きてたか」

隣の席の脇谷がそんな挨拶をしてきた。

「朝から失礼な奴だな」

「なんだよ、一応心配してたんだぜ？ 昨日外に出たつきり帰ってこなかっただろ」

「え？ 誰が」

「だから、お前が」

……？

首を傾げまくる俺に、脇谷は非常に困った顔をした。

「合コンだよ合コン。結局緑ヶ丘の子たちもバスが事故ったらしくて来れなくなっちゃったんだけどな？ お前、バス停見てくるって言ったきり戻ってこないからヤバい連中にでも絡まれたのかと思つてよ」

「あー……」

合コン。バス。

そういえば、そうだったな。

バス停まで行って、それで……。

「バスが来なかったから、帰ったんだっけ……」

いまひとつ記憶が曖昧だが、多分そういうことだろう。

「帰るなら一言くらいかけて帰れよなー。あ、先生来た」
担任が教室に入ってきて、それでその話題は途切れた。

1 限目はちよいと苦手な数学だったりする。

俺は一応ノートと教科書を開いて、ただ座っていた。

……しかし変な話だよな。

昨日のことなのに記憶が曖昧とか。

もしかして俺、なんか深刻な病気にかかってたりしないか？

喧嘩でよく頭ぶついたりしてたもんなあ。うわ、そのせいだったらどうしよう。自業自得過ぎて泣くに泣けないよなあ。せめて彼女の1人くらい作ってから死にた……

「おい久城ー、聞いてるかー」

コツコツと、テキストで頭を叩かれて我に返る。

気がつけばすぐ横に愛称『バーコード』の数学教師が立っていた。

「ノートも真っ白じゃないか、まったく。後で職員室に来るように」
バーコードはそう言い残して教壇に戻っていった。

……朝からついてねー！！

昼休み。

俺は弁当をかきこんでから、しぶしぶ職員室に向かうことになった。

「失礼しまーす」

教師陣もちょうど昼飯を終えた頃なのか、見た感じ職員室は空いていた。うちの学校の教師は昨今の値上がりにも負けず喫煙率が高かった気がするから、恐らく一服しに外にでも出ているんだろう。……ていうかバーコードもいねえし。

出直すか、と踵を返そうとしたら

「久城君？」

後ろから、細くて綺麗な声に呼び止められた。

この声は。

「木村先生！　ちわつす！」

ゆるふわ愛され系の栗色ロング。

天使のような笑顔に、それを際立たせる純白の白衣。

そしてその下に隠された超スペクタクルナイスバディ！

我が校が誇る奇跡の養護教諭、ミストンナ木村手鞠先生が立っていた。

「こんにちは。職員室に何か用があったんじゃないの？」

「いやー、バ……じゃなかった三田先生に呼び出しくらってたんすけどいないみたいなんで」

木村先生は「そうねえ」と職員室を見渡した後

「居眠りでもしてたの？　他のクラスの子も三田先生にそれで呼び出されてたから」

気さくに話しかけてくれた。

「今日は考え事っすよ」

「何か悩み事？　だったら抱え込まないでいつでも保健室に来てね」
おお、エンジェル……！

けど今年度木村先生が赴任してきてからというものの、うちの保健室はいつも満員だったりする。

というわけで健康優良児である俺がこうやって先生と話が出る機会なんて、そうそうないのだ。

「でも感激っす。木村先生に名前覚えててもらえてたなんて」

思わず本音を漏らすと、先生はくすりと笑った。

「4月の健康診断のときに皆と一応は顔を合わせてるでしょう？」

久城君って、標^{しるべ}っていう下の名前が格好良くて印象深かったのよね」

おおっ……！

今まで『しるべえ』とかテキストなあだ名の元になってた俺の名前だけど、たまには良いこともあるんだな！

「放課後またいらっしやい。きつと三田先生もいらっしやるわ」

「ういっす！」

俺は上機嫌で職員室を出た。

鼻歌を歌いながら少しスキップ気味に階段を下りていくと、上ってきた側の生徒とぶつかりそうになった。

「おっと、悪い……」

謝った先にいたのは、うちの学校では希少な女子。

しかも、瑞葉だった。

「……………」

驚いているようで、大きな眼を見開いている。

しかし無言。

もうちょつと喋ってくんないかな。

「ごめんなー」

あはは、と愛想よく笑ってみたが、やっぱり瑞葉は喋らなかった。というより、視線が何気に痛い？

瑞葉はそのまま俺を避けて階段を上っていった。

「……………」

そのとき、白いものが見えた。

いや、スカートの話ではなく、服の袖から、だ。

包帯のように見えたけど、腕、怪我でもしてるんだろうか？

そして、放課後。

もう1度職員室に向かうと今度はちゃんとバーコードが席にいて、俺は少しばかりの説教をくらうことになった。

「いいか久城、これはお前のためを思っ言っやってるんだぞ？

高校に入って間もないこの時期が1番大事なんだ。ここで勉強に乗り遅れるとだな……………」

うー、まあ確かにバーコードが言ってることは正しいと思うんだけどな？

でもやっぱ昨日の記憶が曖昧なのがちょっと気になるんだよね！。

どうせ今日暇だし、帰りに保健室寄っってみようかな。

うん、そうしよう。

「おいこら久城！ 聞ってるのか！？」

「ういっす！」

返事だけちゃんと返して、なんとかその場を乗り切った。

教室に鞆を取りに戻っ、そのまま保健室へと向かう。

放課後ともなれば流石に常連の奴らももういないだろう、と踏んでいたのだが。

…………甘かった。

既に部活が始まっている時間ゆえに、

「木村せんせー、ボールが顔に当たって鼻血がー」
とか

「捻挫しちゃったみたいなんすけど診てください手鞠せんせー」

などなど、お前らほんとに高校生かよと言いたくなる男子共が保健室に群がっている。

にも関わらず木村先生は

「はいはい、順番に診るからちゃんと並んでー」

笑顔を絶やさず天使のように対応している。しかも

「あら久城君。三田先生には会えた？」

入り口付近にぼけっと突っ立っている俺に気付いて声まで掛けてくれた。

「はい！ こつてり絞られました！」

「ふふ、その割には元気ね」

微笑む天使。ああ、癒し系。

「あのー、先生にちよつと相談があつたんすけど、今忙しいっすよね」

保健室にはまだごろごろと図体のかい奴らが並んでいる。これを全部診ていたら先生もなかなか帰れないだろう。

「相談ごと？ ならゆっくり聞かないとね」

先生はそう言ってから

「6時にここにいらっしやい。それまでに皆診ておくから」
そつと、俺に耳打ちした。

……こ、これは！

これはまさかのアッハン課外授業！？

……じゃなくって、わざわざ俺のために時間を割いてくれるということだ。

ああ、やっぱり木村先生って良い人だよなあ……。

「じゃ、また！」

俺も他の奴らに聞こえないよう小声で返すと、先生は笑顔で応えてくれた。

とりあえず6時になるまでどこかで時間を潰さないといけない。

こういつとき部活に入ってれば便利だったんだが、生憎不器用で球技は苦手だし校舎内で大人しく活動する文化部も性に合いそうになかったから俺は帰宅部だ。

一旦校舎の外に出るのも面倒だし、教室でちよつとばかり居眠ろう。

そついう結論に達して教室に戻ると。

「……？」

俺の机の上に、何かが落ちていた。

よくよく見ると、それはノートの切れ端で。

『早く下校しろ』

とだけ、書かれてあった。

「……………」

このメモは俺宛てなんだろうか？

正直、見たことのない字だった。

形の整った綺麗な文字。

男の書く字でもなさそうなんだが、ほとんど接点のないうちのクラスの女子がこんな伝言を書くとも思えない。
すると教師の誰かだろうか？

「……ふむ」

結局、このメモは誰かが誰か宛てに書いたものがたまたま俺の机の上に落ちたんだろうと思うことにして、俺は机に突っ伏した。

目を覚ますと、辺りは薄暗くなっていた。

「……………」

寝ぼけ眼で黒板の上にある時計に目をやると、時刻は6時半を回っていた。

「……やっべ！」

約束の6時を30分もオーバーしちまってるじゃねえか俺の寝ぼすけ！！

俺は慌てて教室を飛び出して、保健室へと急ぐ。

校舎内に人気はない。

部活は6時までという規則だから、当然といえば当然だ。
この分だときつと木村先生も帰ってしまっているだろう。

保健室の前に辿り着く。

案の定、部屋に明かりは灯っていない。

「……はあ」

扉の前で、盛大に溜め息を吐く。

せつかく6時まで学校に残ってたのにこの様だ。

それに先生も待っててくれたかもしれないのに……。

とそのとき、突然目の前の扉が開いた。

「ひゃ！？」

本当に突然だったので思わず後ろに飛び退くと、そこにいたのは白衣を脱いだ私服姿の木村先生だった。

「あ、先生」

「待ってたわよ。さ、入って」

木村先生はいつもの笑顔で俺を招きいれてくれた。

「お茶でも飲む？」

「えっ、いいんすか？」

「安物のティーバッグしかないけど」

そう苦笑しながら木村先生はお茶を準備してくれた。

悪いなーと思いつつ、俺はベッドの端に腰掛けて待つ。

しばらくすると、ふわりと紅茶の良い香りが保健室中に広がった。先生が使っている銘柄は家にあるものと同じ一般的なものだったが、俺の家じゃこんなに良い香りは立たない。

やっぱインスタント紅茶も人を選ぶんだな、うん。

「はいどうぞ」

「どうも！」

差し出されたマグカップを受け取って、そのまま一口ぐりと飲み干す。

さっきまで寝てたから喉渴いてたんだよな。

「それで、相談って？」

丸椅子に座った先生が尋ねてきた。

「いやーそれがつすね、俺昨日の記憶がなんか曖昧で」

「記憶が？　どんな風に？」

「どんな風について言われると難しいんすけど、なーんかいまいち記憶してることに実感が湧かないっていうか……」

そう、ふわふわした感じだ。

昨日の夜、俺は一体何をしていたんだろう。

ファミレスを出たところまではちゃんとほつきり覚えてる。
その後俺はバスを待っていて、それで、でもバスが来なくて……。
この辺りから、どうも記憶がふわふわ……

「……………？」

ふわふわしている。

足元が。

「え……………」

めまいを起こしているかのような感覚。
頭が、ふらついている。

「あ……………」

気がつけば、手に持っていたマグカップをガシャンと床に落としていた。

けど、「すみません」と謝ることすら出来ないほど、頭がぐらくらしている。

俺の身体はそのままぱたりとベッドに倒れてしまった。

「？……………」

身体が思い通りに動かない。

何が起こっているのかさっぱり分からないでいると、ベッドがぎしりと音を立てて軋んだ。

「……………え……………」

目の前に、木村先生がいる。

彼女が浮かべるのは、笑み。

いつもの天使のようなそれではなく、まるで小悪魔か魔女か、そんな妖艶な笑みだった。

「ふふ、案外簡単に引っかけたわね……………」

彼女はすつと、その細い指で俺の額を撫でた。

「!?!?」

なななんだこのアブナイ状況は!?

「……私、ずっと君のこと狙ってたの」

先生は甘い声でそう囁きつつ、その指を額から頬へ、頬から首へと下ろしていく。

「ね、狙ってってな、なんすかそれ!?!」

「知りたいの?」

先生は俺の反応を面白がるように指をさらに下へと移動させた。

さ、鎖骨はやめて!

鎖骨弱いんだよ俺!!

目を瞑ったのが悪かったのか、俺の弱点を察して彼女はそこをずっとなぞった。

「ひいあう!?!」

「あら、良い声で啼くのね」

う、うおおおおん!?!

どうしよう、このままじゃ俺の貞操が!

俺の純潔が!!

奪われ

「るってあア!?!」

気がつけば、俺にのしかかっているのは木村先生じゃなくなっていた。

鬼だ。

キロリと光る紅く邪悪な眼。

禍々しさすら感じさせる鋭い牙。

額に生えた見事な1本角。

「イヤーーーー!?」

じたばたと逃げ出したいが身体は全くとっていいほど動かない。

「君ノ力、微弱ダケドトテモ美味シソウナノ。私ニ、頂戴?」

鬼がニタリと涎を垂らした。

知るかよ嫌だよ食われたくないよ!?

神様仏様ご先祖様、もう誰でもいいから助けてーーーー!!

刹那。

バタンと、激しい音が保健室に響いた。

「!?!」

俺の上に乗っていた鬼が入り口のほうを凝視する。

そこには。

「校内でナメた真似してんじゃねえよド馬鹿共が」

ドアを蹴破り暴言を吐く、瑞葉がいた。

E 3：放課後デンジャー（後書き）

これ以上ないほどノリで書いている本作ですがしょっぱなからお気に入りに登録等々ありますがとうございます。励みになります。

E 3 - 2 : 放課後デンジャー？

「？？」

いよいよ意味不明な事態になってきた。

放課後保健室で木村先生が襲ってきたと思ったら、突然先生は鬼になるし。

そしたらいきなり瑞葉が『ド馬鹿共』とか言いながら乱入してくるし。

……て。

「ド馬鹿『共』ってことは俺も入ってるのか!？」

「当然だド間抜け」

……ド間抜け……。

俺がショックを隠せないでいると、ふと鬼がベッドから降りた。鬼は瑞葉と対峙するように間合いを取る。

「才前ハ……何者ダ？」

「寄生虫に名乗る筋合いはない」

挑発とも取れる瑞葉の発言に、それでも鬼は笑みを浮かべた。

「才前ガ言エタコトカ？」

……？

「お喋りな虫だな。とつとと失せろ」

瑞葉はそう言い放って右腕を前にかざした。

するとその腕は急速に形を変え、人間のものとは到底思えない異形の腕へと化す。

それに驚いている暇もなく、

「ハハハッ」

今度は鬼が高笑いを上げてその腕を瑞葉のほうへと伸ばした。

「……」

鬼の腕は植物の蔓つるのようなものと化して瑞葉の腕に巻きついた。瑞葉はそれを引きちぎろうと腕を引いたが、しなやかで丈夫そうなその蔓はびくともしない。

それどころかミシミシと音を立てて彼女の腕を締めつけ始めた。

「……ッ！」

彼女の顔が段々と陰しくなっていく。

「瑞葉……！」

駄目だ。声は出せても身体が全く動かない。

さっきの紅茶に何か仕掛けがしてあったんだろう。

なんでグイッといっちゃったかなあ俺！？

が。

「……こ、のクソがッ……！」

綺麗な顔に不釣り合いな罵詈雑言を彼女が吐いたかと思うと、その異形の腕が僅かに肥大化する。

と同時に絡んでいた蔓が音を立てて千切れ、弾けた。

「何！？」

鬼は驚いて一歩後退する。

千切られた自らの腕を見下ろし、

「……何故ダ。土ノ匂イガスルノニ」

そう呟いた。

「身の程を知れよ、木偶が」

瑞葉はトドメといわんばかりに鬼の懷へと飛び込む。
その大きな掌で鬼の顔を掴もうとしたその瞬間

「！！」

ふと鬼の姿が元の木村先生のそれに戻った。

糸の切れた人形のようにその場に崩れる先生の身体。

瑞葉はそのまま彼女の下敷きになった。

そして。

「待てこのッ！」

彼女の身体から抜け出たらしい鬼は瑞葉を嘲笑うように天井に張り付いてから、保健室の窓ガラスを派手に割って外へと飛び出していた。

静まり返る保健室。

「ッ、逃がした」

瑞葉のいかにも不機嫌な舌打ちと声がぼつりと響く。

「あ」

気がつけば、俺の身体に自由が戻っていた。

ぱっとベッドから起き上がり、瑞葉と木村先生の下へ駆け寄る。
すると瑞葉が面倒くさそうに木村先生を押しつけて起き上がる。
ころだった。

「な、なあ、木村先生はなんだったんだ？ さっきの鬼にとり憑かれてたのか？」

ごろんと床に倒れている木村先生は、穏やかな顔で眠っている。
見る限りではいつもの先生だ。

「大方仕事中にヘマでもしたんだろ。最近の輩は精霊も持たずに単体で動くからこういうことになる」

瑞葉はまるで木村先生を叱咤するようにそう吐き捨てた。

「仕事中にヘマ？ 精霊？」

さつきから分からないことばっかなんだから分かるように説明してくれないかな。

「知りたいんならこの女に直接聞けこのアホ」

瑞葉はそう言っただけでと手近にあった先生専用の椅子にふんぞり返った。

「アホってなんだよアホって！！」

「わざわざ忠告してやったのにとっとと帰らないバカをアホと呼んで何が悪い」

……忠告？

「あ」

放課後、俺の机の上に置いてあったメモ。

「『早く下校しろ』って、あれお前のメモだったのか！？」

彼女は無言でくると椅子を一回転させた。

無言ということは肯定なのだろう。

「なんであんなメモ……。お前、先生が鬼に憑かれてるって前から知ってたのか？」

「憑かれること自体珍しいことでもなんでもない。特にこの女に憑いてた木鬼は人に寄生するのを好むからな」

「ええ！？」

それってヤバくないか！？

「まあ、木鬼には害意のない奴らが多いし、しばらくして飽きたらすぐに出ていくような奴らだから特に気にしてなかったんだが」

「だが？」

促すと、瑞葉は俺を鋭い視線で射た。

「お前があんな鬼に興味を持たれちゃったせいでこんな面倒なことになっただけだ」

……なんだそれ。

「っていつかなんだよ！ 俺が悪いみたいな言い方すんなよ！」

「別にお前の存在を否定してるわけじゃねえよこのタコ。だからわざわざ早く帰れて忠告してやったんじゃないか」

……う。

「で、でもなあ！？ 名前も理由も書かれてないのにいきなり『早く下校しろ』なんて言われても」

「口ごたえすんな」

ギロリと、すごい勢いで睨まれた。

……なんか今の瑞葉、言葉からして乱暴だけど、それにしてもちよつと機嫌悪すぎるんじゃないか？

鬼に逃げられたのがそんなに悔しかったんだろうか。

そんな時。

「……ん？」

床に倒れていた木村先生の目が、うつすらと開いた。

「……あら？」

緩慢な動きで、先生は上体を起こす。

「先生、大丈夫ですか？」

思わず声を掛けると、彼女はゆっくりと俺を見、瑞葉を見、倒れたドアと割れた窓ガラスという悲惨な保健室の状態を見回した。

「……あー。やつちゃったか」

そしてがつくしとうなだれる先生。

ていうか先生、胸の谷間が見えてま

「ぶッ」

横から即頭部を蹴飛ばされ俺の身体はずしやりと床に突っ伏した。蹴ったのは他でもない瑞葉だ。

「この色ボケが」

……なんか、瑞葉、まじで、怖い。

「おいその巨乳。一応何があつたか説明しろ」

養護教諭とはいえ仮にも先生を『巨乳』呼ばわりする瑞葉に、それでも彼女は笑って答えた。

「あははー。瑞葉さんなら大体察しがついてると思うけどバイト中にちよつとトチっちゃったみたいで、鬼に身体を乗っ取られたのよねー」

やけにぎつくばらんな感じだが、先生と瑞葉は親しいんだろうか？

「これに懲りたらせめて妖の1体くらい引き込んでおけ。自分の始末は自分でつける」

瑞葉は偉そうにそう言うと、椅子から立ち上がった。

「はいはい分かりましたー。てことはあの木鬼は瑞葉さんがやってしてくれた感じ？」

彼女の問いに、瑞葉はピタリと動きを止める。

「……あら？ もしかして逃がしちゃったか」

すると瑞葉は先生に向かって怒り始めた。

「お前の身体が邪魔だったんだよ！ 特にその無駄にでかい胸！！」

「あははー、瑞葉さんだつてあと数年すればもうちよつと大きくなるわよー」

「余計なお世話だ！！」

……うーん。

確かに瑞葉はまだ発展途上な気がする

「ぐへふッ！？」

なぜか再び蹴飛ばされる俺。

「とにかく。あの鬼が調子に乗る前に片付ける必要がある。そもそもお前のヘマが原因なんだから協力してもらっぞ」

瑞葉は木村先生にそう言い放った。

「瑞葉家のお姫様にそう言われたら仕方ないわねー」
「やれやれといった感じに先生も立ち上がる。」

そんな2人をぼけつと床に倒れたまま眺めていると

「おい久城。お前もだ」

ガシリと瑞葉に首根っこを掴まれた。

「……は？」

そのまま無理やり立たされる。

「あの鬼は恐らくお前を狙ってくる。無闇に探すよりお前をエサにしたほうが早い」

ふーん……

つて!!

「ふざけんな！ エサってなんだよエサって！」

「エサはエサだ。つまり罠」

「それくらい分かってるよ！ なんで俺がそんなことしなきゃいけないんだよ！」

「お前にも落ち度はあるからな」

「知るかッ！」

「久城のくせに生意気だ」

「どつちが生意気だよ!？」

ガミガミ喚いていると。

「あーあーもう、駄目よ瑞葉さん。お願いごとをするときは、ちゃんとそういう態度を取らないと」

さっきまで鬼に身体を乗っ取られていたというのに、木村先生はやけに落ち着いた様子ですつと俺の前に出た。

そして。

「ねえ標君……今回だけ私に免じて協力してくれないかしら」

どこか潤んだ瞳で俺の顔を覗き込み

「お・ね・が・い」

耳元で、甘くそう囁いた。

「……！」

耳朶にかかる優しい吐息に思わず背筋が震える。

「……う、ういっす……」

流れて返事をしてしまうと

「フフ、良い子ね」

先生は俺の頭をも軽く撫でた。

「く、くすぐったいですって！」

「あらやだ照れてる？ かーわいー」

ああ俺もてあそばれてる！？

……って！

「……………」

ギロリと。

瑞葉の、生ごみを見るかのような視線が痛い。刺さるほど痛い。

けれど先生はそんな彼女にたじろぐことなく

「さて。流石に今日は向こうも警戒して仕掛けてはこないでしょう。
このまま解散でいいかしら？」

そう提言する。

「いや、それは……」

瑞葉が慌てたように何か言いかけたが

「ん？ 何か問題があるの？ 出来ればこの保健室、今夜のうちに
修復しておきたいんだけど」

木村先生の言葉に瑞葉は渋い顔をしつつ

「……別に」

そう吐き捨てて、保健室を出て行く。

「あ、おい瑞葉！」

俺が呼び止めても彼女は立ち止まることなく、すっと廊下の闇に消えていった。

「行っちゃった……」

結局、この事態がなんだったのか彼女の口から1つも説明を受けていない。

「ふふ、巻き込まれちゃったわねー」

傍らの先生がどこか面白そうにそうこぼしながら、流しに置いてあったゴム手袋をはく。どうやらガラスの破片を片付けるらしい。

「先生、瑞葉のことなんか知ってるんすか？」

「ん？ そうねえ、知り合いつてわけじゃないんだけど瑞葉家っていうとこの辺り一帯のアレだからねえ」

「アレ？」

「そう、アレ。私みたいなフリーランスでも一応気を遣うのよねー」
手際よくちりとりで破片を片付けていく先生。

俺も慌てて掃除道具入れからモップを取り出し、自分がこぼしてしまった紅茶を拭く。

「フリー……って、なんすか？」

俺がそう尋ねると、先生は心底驚いたように目を丸くした。

「あれ。久城君知らないの？ まったく？」

いや、何を知らないのかも俺はさっぱり分らないんだけどね？

俺のぼけっとした様子から何かを悟ったのか、先生は少し難しげな顔をした。

「……なるほど。君は覚醒型なわけね」

「はい？」

「まあその辺りはどうでもいいか」

「いやよくないっすよ、なんすか先生まで瑞葉みたいに
すると彼女はくすりと笑った。

「教えてくださいよ、気になるじゃないっすか。さっきの鬼といい
瑞葉の腕のことといい」

俺が懇願すると、そうねえと先生は少し逡巡してから俺に告げた。

「私はフリーの何でも屋、瑞葉さんは桃太郎ってとこね」

「はい？」

「そのままの意味よ。最近公務員のお給料も減りに減ってるからね
え、内緒でバイトしてるの」

「バイト？」

「軽い除霊とか、たまに恋占いもやるわねー。あとはその手の仲間に
情報を売ったりとか」

そ、そっち系のバイトですか。

「で、瑞葉さんは生粋の桃太郎。鬼を退治するのがお勤めってこと
ねえ。……まあ彼女の場合あれだけど……」

「さっきからアレアレってなんなんすかもう！」

「そんなに気になるの？　もしかして久城君、瑞葉さんみたいな子
が好みとか？」

「そ、そんなんじゃないくて！」

俺が赤面して吼えると、先生はさらに可笑しげに笑っただけだった。

……恐るべし木村先生。普段から男に囲まれてるだけあってあし
らい方に隙がない。

「今日はもう遅いから帰りなさい。気をつけて帰るのよ」

有無を言わせぬ強引な笑顔で見送られ、俺はしぶしぶ学校を後に
した。

E 3 - 2 : 放課後デンジャー？（後書き）

更新遅くてすみません。ぼちぼち進めていきたいと思ひます。読んで下さっている方々、ありがとうございます。読ん

E 3 - 3 : レッツレスン手鞠先生

端的に言えば、神木町は田舎だ。

町という位置づけだが、面積、人口という点では隣の市とほとんど差異はない。

そも、何をもって都会と田舎を区別するのは案外難しいところだが、こと神木町においては空気が田舎だったりする。

山に近く、海に近く、しかし決して大都市から離れているわけではなく、むしろ電車を使えばものの1時間で政令都市に遊びに行けたりもする。

つまるところ、この町自体にはこれといった特徴がないというのがその空気の原因だったりする。

まあ、それはあくまでも『表』の話だが。

そんな、どこか寂れた空気が漂う神木の夜道を、ひとりの少女が歩いていく。

紺色のセーラー服、漆黒の髪は夜の闇に溶けきっており、僅かに袖から覗く手と顔の白さが浮き彫りになっていた。

その白さに惹かれるように、もしくはその強い闇に惹かれるように、彼女の前方にふらりと2つ、人影が浮かび上がる。

身の丈は決して大きくない。

子供のようにも見えるその人影。

否、それは人ではなく鬼だった。

「また心鬼か。どこから湧いてやがる」

少女はまるで虫でも見るかのような目でその異形を見、盛大に顔をしかめた。

鬼は構わず、彼女のほうへとゆるゆると寄ってくる。

その動きは非常に緩慢で、まるで出来の悪いロボットだった。

少女　瑞葉茨乃は一片の躊躇いもなくその鬼の顔面を蹴飛ばす。間髪いれずその隣の鬼にも一発食らわせ、両者を昏倒させた。

が。

「!？」

すぐにまた、ゆるゆるとその2匹の鬼は立ち上がり始めた。

これに一瞬ひるんだ彼女に、それでも鬼は構わず寄り付いてくる。その様子はまるで、盲目的に母を求める幼児のようでもあった。

「……ッ、触るな！」

反射的に、彼女は自らの右腕を使っていた。

それは振るわれたと同時に異形の凶器と化し、まとわりついた鬼2匹の身体をへし折るように薙いでいた。

鬼は完全に消滅。

彼女はそれを見届けて、憎憎しげに腕を下ろした。

「……………」

鋭い視線で、空を仰ぐ。

星は、ぼやけて見えなかった。

＊ ＊ ＊

朝は、嫌いなはずだった。

けど今朝はなんだかいつもより目覚めがいい。

ここまで気持ちいいとむしろ二度寝したくなってしまう……が、そんなことしたら遅刻するのでやめておいた。

いつもより早めに登校すると、隣の席の脇谷が心底驚いたような顔をした。

「お前がこんな時間に来るなんてめっずらしーこともあるもんだな？　槍でも降るんじゃない？」

「相変わらず失礼な奴だな。俺だってたまにはお目目パッチリな日があるんだよ」

「ほーう？」

そんな他愛のない話をしていたら、ふと教室に入ってきた女子生徒と目が合った。

瑞葉だ。

俺はいそいそと彼女のほうまで駆けていく。

「おい瑞葉！　お前何の説明もなしにさっさと帰んなよな！？」

開口一番俺がそう言っていると、彼女は鬱陶しそうに俺を睨んだ。

と同時に周りの奴らも驚いたような、それでいて好奇の目でこっちを見てくる。

「……………」

視線が痛い。

そしてトドメは彼女のそっぽ。

あからさまにシカトされブレイクハートした俺はそのまま廊下に飛び出した。

「なんなんだよあいつ！」

ぷりぷりと腹を立て目的もなくずかずかと廊下を歩いていると、なぜか保健室前に辿り着いてしまった。

まあ、保健室は1階の1番奥にあるから真っ直ぐ歩けばここに辿り着くことになる。

「……………」

そついや保健室はちゃんと元通りになったんだろうか、なんてことが少し気になって俺はそつと扉に手をかけた。

人の気配がしなかったので鍵がかかっていそうだったのだが、予想に反して扉は易々と開いた。

朝の保健室。

いつもとなんら変わらない光景。

昨日割れてしまった窓ガラスも、どういう手を使ったのかすつかり元通り　　というか新しいものに換えられている。

昨日の1件など、これでは誰も窺い知ることは出来ないだろう。

「……………」

ふと視線を奥のベッドに移すと、見えたのは脚。

肌の色を受け少し茶色がかって見える黒のストッキングが、その美脚をより艶めかしく魅せる。

その脚だけでベッドに寝転んでいるのが誰だか分かってしまった。

「……………」木村先生、朝からこんなところで寝てていいんすか」

朝日を受け、白く輝くベッドの上に横たわるのは天使、もしくは女神のような木村先生。

俺が近づいて声をかけても、彼女はまだ夢の中らしく、むにゃむにゃ何か呟いている。

「こーうちよーせーんせー。ぐふふ」

……こうちようせんせい？　ぐふふ？

今の木村先生は普段では決して見せないような緩みきった顔をしている。

それこそ恋人にしか見せない一面、みたいな。

「こっちむいてよう」

先生の寝言はまだ続いている。

夢の中で校長を振り向かせようとしているのだろうか。

というか、うちの校長は来年定年、それにしても老け顔のしわしわなおじいちゃんだったりする。

まさか木村先生って、そういう趣味なの、か……？

「ああん待って！」

その声と共に、先生は飛び起きた。

「……………」

「……………」

目覚めの意識ははつきりとしているのか、先生は俺を見て固まっている。

そして数秒経った頃

「あら、おはよう久城君」

いつもの営業スマイルに戻った。

「先生って、熟年趣味だったんすか」

「！？」

「ぐふふって」

「ぐふふ!？」

「言ってましたよ」

「そ、そんなことっ」

「こーうちょーせんせーって」

「あああ言っちゃ駄目!! それは私のトップシークレット!!」
手で顔を覆ってガツクリとうなだれる木村先生。

……ふ、これで昨日の借りは返したな。

「久城君たら意外とイケズね」

そう言っただけの先生はお世辞抜きで可愛かった。

これで熟年趣味というのだから勿体無い。

「そんなこと言ったら先生だって意地悪っすよ。昨日のこと何にも教えてくれなかったし」

すると先生はやれやれと軽くその髪をかき上げた。

「仕方ないなー。じゃあここで軽くレッツレッスン？」

「え、いいんすか? やった」

「オーケーオーケー。プリーズシッダーン」

そんな適当なノリで先生の講義は始まった。

「で、何を知りたいの？」

木村先生は先生専用の背もたれ付きの椅子に腰掛け直し、向かいの丸椅子に座る俺を見据えた。

「全部」

「あら、欲張りさんね」

先生はそう笑いつつもどこか投げやりな表情を一瞬垣間見せた。

実は先生も瑞葉と同じで相当な面倒くさがりだったりするんだろ
うか。

が

「じゃあ最初からねー。まず鬼の存在からかしら？」

本当に知りたいところから喋ってくれるあたり、やはりお人よし……というか面倒見がいいのだろう。

「ひとくくりに鬼って言っても、現代じゃ色んな種類があるの」

「はあ」

「私に憑いていた木鬼は古から存在する妖に近いものね。まあ、五行の名を冠する鬼はそれぞれ起源こそ違えどカテゴリー的には同じに割り振ってもいいと思うわ」

「はい先生」

すちやりと挙手する。

「なあに、久城君」

「既にわけわかんねえっす。『ゴギヨウ』ってなんすか？」

「ググれ」

先生は笑顔でばっさりそう切り捨てた。

「ひどッ！？」

「あーもーほんと久城君て初心者ね。何の心得もないの？ 鬼が見えるのに？」

先生は大きく溜め息をついた。

……ああ、そうか。

鬼ってやつぱり、普通の奴には見えないんだ。

「私としてはむしろどうして君がそんなに無知なのか知りたいくらいよ」

先生はぼそりと、独り言のように呟いた。

……そんなこと言われてもなあ。
知らないものは知らないんだし。

「俺、見えるようになったのはほんとつい最近なんすよ」

正直に言う。隠しても仕方のないことだ。

「つい最近って、どれくらい？」

「ほんの１年とちよつと前くらいっす」

俺がそう答えると先生は目を丸くした。

「……それは、確かに最近ね……」

彼女は顎に手を当ててなにやら難しい顔で考え込んでいたが

「そういうことなら仕方ないわね」

どこか諦めを含んだ声でそうこぼしたかと思うと。

「君は今、腹痛を訴えている」

「へ？」

「あまりにもお腹が痛かったのでベッドに横になりながら木村先生の子守唄を聞いていました、と担任の先生には言っておくのよ？」

「はあ」

そういうわけで俺はこの１時間、先生からある種の裏知識を教授してもらったことになった。

E3-3:レッツレスン手鞠先生(後書き)

ぼちぼちとか言って連日更新とかなんかもう気分を更新してます
みません。不定期ですがどうぞよろしくお願いします。

E 3 - 4 : レッツレッスン手鞠先生？

1 限目の開始を知らせるチャイムが鳴る。

グラウンドではどこかのクラスの奴らがぱらぱらと準備運動を始めていた。

そんな様子を傍目に、木村先生は伝言用の小さなホワイトボードを抱えて俺に向き直った。

「なんだかんだ言っても、世間には2種類の人間がいるの」

「はあ」

「見える人と見えない人よ」

「先生、そのフリーズどつかのゲームで聞いた気がします」

確か大きなモンスターを狩るゲームで猫が喋ってました。

「瑞葉さんと私、そして君は要するに見える人なのよ」

先生は俺のツッコミを無視して喋り続ける。

「でも私たちと君の間には大きな壁 違いがあるようね」

「違い、ですか」

「君の両親は見えないんじゃない？」

「……そう、っすねえ。見えるなんて聞いたことないしそんな素振り全然ないっす」

すると木村先生は「やつぱり」、と頷いた。

「君が覚醒型って言ったのはそういう意味よ」

「……つまり、遺伝とかそんなんじゃないくて、ぱっと急に見えるようになる奴のことっすか？」

「んー、まあそうねえ。でも覚醒型の子達だって生まれつき見える子や本当に幼い時分に何らかのきっかけで見えるようになる子がほとんどよ。君みたいに10代を越えてからって例は稀だと思っわ。少なくとも私の周りでは初めて聞いたわね」

……そういえば、そんなことを前にも言われたかもしれない。

「まあとにかく、見えるようになったものは仕方ないしね？
今更元に戻るっていうのは無理な話よ」

「はあ」

俺が気の抜けた返事を返すと木村先生はどこか眉をひそめた。

「……というか久城君の場合、その点はもう克服してる感じね？
物心ついてから見えるようになるってのは結構辛いんじゃないかと思っただけ」

「はは、まあその辺はもう諦めました」

思わず頭をかく。俺の能天気さに呆れたか、先生も詮索を諦めたように息を吐いた。

「まあその辺りはおいおい聞くとするわ。とにかく君は無知だからね」

そこまで言っただけで先生はふと考え込む。

「……いえ、もしかするとこれは意図的なのかしら」

明後日の方向を見て難しい顔をしている先生。

「せんせー、早く次教えてください」

俺がせがむとはいはいと彼女は再び向き直った。

「でね、私の場合は父が覚醒型だったみたいで、その血を受け継いだみたいなの。だからもともとそういう家系ってわけじゃないのね」
ふむふむと頷く俺。

「歴史のない家はコネも経験もないからそういう面では仕事ににくいよ。だから父は極力普通に生活してたみたいだけど、私は昨日言っただけにバイト程度にちよつとだけ働いてるの」

「はい先生。昨日たまたま見た映画で公務員はバイト禁止って言ってました」

「そんな法律もあったかしらねー」

先生は笑って流した。

「要は職務専念義務の問題でしょ？ 通常業務に支障が出てない限りは問題ないわよ」

先生は得意げにそう言うが。

「……支障、出てませんでした？ 昨日」
「うっ」

先生はそのバイト中に鬼に憑かれて昨日の事件を起こしたことになるわけ。

「……………意外と痛いところを突くわね久城君」

先生はまるで幽霊のように髪をだらりと垂らして落ち込んでいる。

「え、いや別に突きたくて突いたわけじゃないんすけどね!？」

「……………そうなの？」

先生は潤んだ瞳で俺を見つめてくる。

う。

その眼が昨日の『お・ね・が・い』を想起させて思わず腰を引いてしまった。

が、それを好機ととったのか、先生は一瞬蠱惑的な笑みを浮かべる。

「ねえ、標君？」

先生はすつと椅子から身を乗り出してくる。

「昨日の件は本当に悪かったと思ってるわ……。保健室の窓だってポケットマネーで修繕したし、実害が及んだのは君だけ……」

伏目がちに、それでも先生は迷わず俺の首筋にその細い指を添えてきた。

「君が許してくれたらいいんだけど……どうしたら許してくれるかしら」

先生の指は探るように俺の弱点 鎖骨に向かって伸びている。

そ、それ以上触られたらまた変な声がッ！

それだけはいやァッ!!

「わかりましたわかりました！　許しますし責めたりしませんからそれ以上指下ろさないでえッ！」

「あらそう？　良かった」

先生はぱつといつもの笑顔に戻って浮かせていた腰を元の椅子に戻した。

「……………うっ」

「それにしても鎖骨が弱いなんて久城君ってば可愛いのねー」

「……………もうどうとでも嗤ってください。げっそり」

俺は本当にげっそりと俯いた。

「あら、褒めてるのに。ちよつと触っただけで感じてもらえるなんて久城君の彼女になる子はきつと幸せねー」

オッサンですか先生。

ていうか

「それ褒め言葉なんすか？　聞き方によつては現状俺には彼女がないということを皮肉っているようにも聞こえるんすけど」

「だっていないんでしょ？」

「なぜそれを！？　俺そんなにモテない顔してますか！？」

結構本気でシヨックを受けながら叫んだのだが、先生はへらりと笑った。

「君の『気』には混じり気がないからねー。きつとそうだと思ったのよ」

「…………『気』？」

先生はコクリと頷いた。

「ついでしたしその話に移りましょうか」

そう言っ先生は脇に置いていたホワイトボードを再び抱える。

そこには『木、火、土、金、水』の5つの漢字が書かれてあった。

「これが五行よ」

「はあ」

「万物はこの5つの元素から出来ているっていう中国の思想なんだけどね、私たちの間では属性の意味で用いることが多いわ」

「属性？ ゲームとかでよくあるあの属性っすか？」

「そうそう。私の場合木の属性を持っているの。そして君からも同じ気を感じる」

「木、ですか」

「勿論属性を持たない『無』の人もいれば、複数の属性を持ち合わせて『混沌』となっている人もいるし、例外は多々あるんだけどね」「へえー……。あ、じゃあ瑞葉は？」

すると先生はくすりと笑った。

「ほんとに久城君は瑞葉さんのことが気になるのね」

「だからそういうんじゃないって！」

先生はひとしきり笑った後、言った。

「彼女の属は『滝』」

ん？ 滝？

「それ五行の中になくはないっすか？」

「これが典型的な例外のひとつね。瑞葉さんの家は昔からこの神木町一帯を裏で治めていた主の家なの。私の家と違って古い古い歴史を持った伝統のあるお家なわけ」

「はあ」

「瑞葉の家ももとは『水』の属だったんでしょけど、その血を濃くして力を強めていったんでしょね。つまり一般的に言う『水』の属とは一線を画す力を持っているの。だから属も名を変えて『滝』」

「……超・水、って感じっすか」

「むしろハイパー・水って感じね」

……ハイパーか。すごいな。

「でもそれとあの腕となんか関係あるんすか？」

俺が率直に尋ねると、先生は曖昧な笑みをこぼした。

「私も本人から直接聞いたわけじゃないから詳しくは知らないの」……むう。この顔は何かしら知ってるけど言わないいつもの顔だ

な。

「本人に聞けってことっすか？」

「まあそれが1番手っ取り早いんじゃないかしら。でもあんまり女の子の身体の話にズケズケと踏み込んだんじゃ駄目よ？」

……う。

そんなこと言われたら訊きづらい。

ていうか、俺が訊いてもあの瑞葉が答えてくれるとは限らない。むしろ答えてくれない可能性のほうが高い気がする。

俺の思考を表情から読んだのか、先生は苦笑した。

「……まあ、あれが鬼の腕なのは確かね」

「鬼、っすか」

「そういえばその話の途中だったわね。鬼にも色んな種類があると言ったでしょう？ さっき言った五行の属を司る鬼が典型的な五鬼なんだけど」

「ああ、昨日瑞葉が言ってた『木鬼』って、木の鬼ってことっすか」「そうそう。木鬼はもともと森に棲む妖精って説があるくらい悪戯好きでね。昨日みたいに勝手に人間に憑いたりするのよ」

まるで他人事のように言う木村先生。

昨日のことは忘れたいというのが本音なのかもしれない。

「火鬼は地獄を起源とするって説が色濃いわね。そのせいか霊や強い念に惹かれやすいとか」

「なんか物騒っすね」

いやいや、と先生は首を振る。

「まだ火鬼はマシなほうよ。小物だったら近くの霊を払えば消えてくれることもあるみたいだし。五鬼の中で1番厄介だと云われているのは実は土鬼なの」

「土の鬼、っすか。イメージ的に地味な感じがするんすけど」

すると先生は少し声を落として皮肉げに、なおかつ脅すように言

った。

「あら、そんなこと言ったら土耶どぢやに殺されるわよ？」

「つちや？」

「この辺りに住んでる土行の古い家。今じゃもう大分廃れてるみた
いけどプライドだけはやたら高くて何かしら幅を利かせてくるの
よねー」

先生は心底鬱陶しそうにそうばやいた。

どうやら個人的な恨みが何かしらあるらしい。

「おつと話が逸れたわね。とにかく土鬼は凶暴で、私みたく戦闘経
験に乏しい若輩なんかは出会ったらまず逃げると言われてるくらい
よ。若気の至りで果敢に挑んで散っていった同胞が多いんでしょ
うね」

「へ、え……」

具体的にそう言われるとなんだか恐ろしい気がしてきた。

顔が蒼くでもなっていたのか、先生が慌てて付け足す。

「心配しなくても現代じゃあそうそう土鬼になんて遭遇しないわよ。
盛者必衰　力が強いものほど廃れやすいつてことね」

「はあ……」

でも、少しだけ引つかかることがあった。

昨日、あの木鬼がこぼした言葉。

『……何故ダ。土ノ匂イガスルノニ』

やっぱり土って、言った気がする。

それって……

「おつと。そろそろ1限目も終わりね」

先生がそう呟いた途端、チャイムが鳴り響く。
と同時に遠くから地響きのような音が聞こえてきた。

木村先生に虜にされた奴らが競うように保健室へ向かってきているのだろう。

「先生、ありがとうございました！」

俺はすちゃりと立ち上がる。

これ以上長居したら先生のファンに睨まれる……というより袋叩きにされそうだ。

「どうも。また放課後にね」

先生は笑顔で俺を見送った。

E 3 - 4 : レッツレスン手鞠先生？（後書き）

ほとんど会話ですみません。説明はいつも苦手です。

明日ももしかしたら更新するかもしれないです。いつもありがとうございます。

E 3 - 5 : v s 木鬼

今は使われていない、プレハブの放送室。

みすばらしいその一室の真ん中に、この寂れた空間には似合わない黒いソファーがどんと置かれている。

そしてその上に、当たり前のように腰掛けている女が1人。

「おせえよ馬鹿。どこほつつき歩いてたんだ」

彼女の開口一番は、そんな罵声だった。

「なら集合場所とか先に言っとけよ！ 朝とかシカトしたくせに！」
俺はカツとなつてつい反論する。
だつて仕方のないことなのだ。

今朝木村先生が『また放課後にね』と言ったから、とりあえず放課後保健室に向かったのだ。

けれど保健室は閉まっていて、先生は留守。
職員室で他の先生に聞いたところ、6限目の体育の時間に骨を折る大怪我をした生徒がいたらしくその付き添いで先生は郊外の病院にいるのだとか。

それで仕方なく教室に戻つてみたのだが、瑞葉の姿もなく。

途方に暮れた俺はとりあえず教室に残っていたクラスメイトに瑞葉の居場所を聞きまわつたのだが知っている奴などいなかったわけ。
で。

「わざわざ校内に残つてた連中にまで聞き歩いたんだぞ！！ 最終的にはタローさんにまで聞いたんだぞ！？」

瑞葉の居場所はそのタローさんに教えてもらった。

ちなみにタローさんというのは校舎4階の男子トイレにたまにいる若い兄ちゃんだ。

「大体なんでこんなとこにいるんだよ。ここもう使われてないんだろ？」

部室棟の1番端つこにぽつんと置かれているこのプレハブ。

少し前まで職員室横の放送室の機材入れ替えの際に仮の放送室として使われていたらしいが、今はその役目を終えているはずなのだ。

「使われてないから私が使ってるんだろ」

脚を組んだ瑞葉は堂々とそう言った。

既にこの部屋は瑞葉のものと化しているらしい。

「それは流石に横暴じゃ……」

「久城のくせに難しい言葉使うな？」

「おま、どんだけ俺のこと馬鹿だと思ってるんだよ！？」

すると瑞葉はふと考える素振りを見せてから真顔で答えた。

「私が見てきた人間の中で1番馬鹿だと思ってる」

……真顔で答えなくていいしそんなの。

俺がへたりとその場に座り込むと同時に、後ろの扉がカラリと開いた。

「お待たせー！ いや参ったなーほんとごめんねー」

まるで飲み会に遅れてきたかのようなノリで入ってきたのは他にもない木村先生だった。

「ん？ どしたの久城君、骨抜かれたように座り込んでるじゃって」

「……どうせ俺は骨なしの馬鹿ですよー」

薄青のカーペットにのの字を書く俺。

そんな俺を無視して瑞葉はすくりと立ち上がった。

「とつとと奴をおびき寄せるぞ」

「でも瑞葉さん？ 久城君を囚にするって言うてたけど具体的にはどんな風に？」

先生の問いに瑞葉はさらりと答える。

「縛る」

……って。

「ちょっと待てえ！！ なんだよ縛るって、おい！？」

俺が思わずツツコミを入れたときにはなぜか既に瑞葉の手には口
ープらしきものが握られていた。

「おい保健医、久城を押さえろ」

「はいはい」

後ろからガシリと先生に肩を掴まれる。

「って先生！ 何協力してんですか！？」

「ごめんね久城君。今後私がこの町で商売していくにはやっぱり瑞葉
さんの言うことは聞いておいたほうがいいのかなーと思うのよ」

さめざめといった風に先生は言うが明らかに声色は愉しんでいる。

「殊勝な心がけだな。さてどう縛り上げるか」

「はいはい！ 私的には亀甲縛りとか生で見てみたいなー」

「いきなり高度な縛り方希望すんな。ちょっと待ってろ、今やり方
探す」

ポケットから携帯を取り出し片手で検索し始める瑞葉。

「やめんか変態どもー！！ うわああああん」

* * *

紺碧の空にかかる灰色の雲。

それしかない。というかそれしか見えない。

「鬼に食われたら絶対あいつの前に化けて出てやる」
俺の恨み言がぼつんと校庭に響く。

……何が悲しくて夜中に朝礼台の上に磔にされなきゃなんのか
ッ！！

しかもなんか結局ぐるぐる巻きだし！
瑞葉の奴意外と不器用だよな！？

「……………」
虚しい。

俺がここに縛られてから一体どれくらいの時間が経過したのだろ
う。

小1時間くらいは経った気がする。

「なあー」
もういいんじゃないかなー、と後ろの植え込みに隠れているであ
ろう瑞葉と木村先生に呼びかけようとしたそのとき。

「見ツケタ」

異質な声が降ってきた。

「……」
次の瞬間、俺の上に覆いかぶさるように降りてきたのは隻腕の木
鬼。
間違いなく昨日の鬼だ。

っーかなんでこいついちいち俺に覆いかぶさるんだよ！？

とその時、横からぐんと何かが伸びてきて木鬼を捕らえようとし

た。

瑞葉の手だ。しかし

「っ」

鬼は素早くそれを回避。どうも逃げ足は速いらしい。

「ち！ ちょこまかと！」

瑞葉が茂みから出てくると同時に、その爪で俺のロープをブチりと切った。

鬼が現れれば俺の拘束を解く　もともとそういう約束だったのだ。

「ハハッ」

木鬼はそんな笑い声を上げたかと思うと、昨日と同じように残っているほうの腕を瑞葉のほうへと伸ばした。

腕はそのまま蔓になり、瑞葉の腕へと絡みつく。

しかし勿論瑞葉は涼しい顔をしている。

「こっちの腕も無くしたいのか？」

そう言っただけで彼女が腕に力を籠めようとしたその時

「舐メンナヨ」

「！！！」

鬼の、昨日瑞葉が千切ったほうの腕が蔓となり彼女に向かって伸びた。

「ッ！？」

その腕が巻きついた先は彼女の左腕。

鬼の腕でもなんでもない、普通の人間の腕だった。

「……………あッ」

「瑞葉ッ」

あれはやばい。

あんなのに締め付けられたらそれこそ腕が千切れちまう……………！！

が、俺が飛び出す前に別の人影が前に出た。

木村先生だ。

「かなきり金斬、任せた！」

「合点承知！」

すると素早い動きで何かが鬼の蔓の腕を断ち切った。

「！？」

鬼は驚いて後退する。

木村先生の側で宙に浮いているのは……小人？

「昨日瑞葉さんに言われたからねー。仕事的时候は妖の一体でも取り込んでおけて」

先生はそう言ってその頭を撫でた。

「子ども扱いすんなやい！！」

その小人　金髪の、少年のような容姿をしている　は、木村

先生の扱い方を突っぱねつつも頬を赤く染めていた。

照れているのだろう。

「……貴様、『木』ノ属ノクセニ『金』ノ妖ナドドウヤツテ手二入
レタ」

鬼の問いに、先生は不敵に笑って答える。

「私に憑いてたくせに知らないの？　リースよリース。情報と交換で、ね」

リース？　リースってあの賃貸リース借？

じゃああの小人……妖は誰から借りてきたってことか？

「妖の貸し借りとは、最近の輩はなかなか洒落たことをしやがるな」

瑞葉も完全に拘束から解かれて、木鬼をにらみつけている。

両腕を斬られた鬼は先生と瑞葉に挟まれた形になった。
誰がどう見てもこれで詰み。

……の、はずだったんだが。

「！」

ぼけつと突っ立っていた俺を、木鬼の眼が鋭く射抜く。

「あ」

瞬間、まるで頭をズンと突かれたかのような衝撃を覚えて思わず俺は後ろにのめった。

そして。

「しまっ」

瑞葉が先生か、むしろ両方の声だったような気もするがそんな声が聞こえたと同時に、俺の意識はブツリと切れた。

E 3 - 6 : v s 木鬼？

木鬼は人に憑くのを好む。

それが大前提だったにも関わらず、この場に来て2人は失念していたのだ。

久城標に鬼がとり憑く可能性を。

「ッ」

瑞葉茨乃はあからさまに舌打ちする。

対して木村手鞠も舌打ちこそしないが不愉快げに目を細めた。

「ははっ、すごいなこの身体。底が知れない。分からない。無知ゆえの無限、無垢ゆえの夢幻か？」

久城標の形をしたそれは機嫌よく、滑らかに言葉を発する。

「ここまで居心地が良いと手放すのは勿体無い」

まるで自己愛者ナルシストのように、彼はうつとりと自らの手をその頬に寄せた。

「……………」

「……………」

「……………なあ保健医」

「なに、瑞葉さん」

「キモイからあれごとぶっ飛ばしていいか」

「や、まずいんじゃない。一応久城君だし」

木鬼は今だ恍惚とその手を眺め、そしてその身体に触れていく。

「はは、身体つきも丁度いい。人間の女の身体は脂肪が多くて動きにくいからな」

「……だってよ、保健医」

「……ぶっ飛ばしましょうか、やっぱり」

すると鬼はにたりと嗤った。

「やれるものならやってみる」

その挑発に乗ったのは手鞠だった。

「金斬！ 一発ぶちかまさない！」

「ええ！？」

当の金斬が困惑している間に、鬼は一直線に2人のもとへと駆ける。

その速さは獣並みだった。

「ぶちかますってどうすんだよ！？ あれじゃ斬れねえだろ！？」

「ぶつかって止めなさい！」

「は！？」

手鞠はむんずと金斬の身体を掴むと、高校球児顔負けの見事なフォームで彼を投げた。

「なああああーーーー！？」

獣のように疾走していた木鬼と、まさに剛速球な金の妖が、正面から激突する。

否、激突したのは互いの『気』だ。

物質的に触れる寸でのところで木と金の気がぶつかり合っているが。

「ぬわぁっ」

勢いの点で自主的に走っていた木鬼のほうに分があったのか、金

斬はあえなく吹っ飛ばされた。

その際、一種の均衡状態が弾ける。

自然と鬼の体勢も少し崩れていた。

その隙に

「これでどうよ!!」

手鞠は腰から名刺サイズのカードを取り出し、それを数枚鬼のほうへと投げつけた。

(……あれは)

茨乃は目を細めその白いカードを凝視する。

それらはまるで意思があるかのように宙に浮いたまま鬼を取り囲み、光の線で円陣を生成した。

「ッ!？」

途端、明らかに不自然に鬼の動きが止まる。

「符、ダと……!？」

手鞠が投げたのは『最新型』の属性護符だ。

属性護符は通常オーソドックスな札の形をとっており、1枚につき1属性というのが基本だ。

しかしこのカードタイプは札のそれよりもコンパクトで目立たず、しかも1枚で全ての属性に対応している。

つまりところ携帯しやすいマルチな結界というわけだ。

「……ッ」

久城標の身体がブレる。

「苦しみたくないのならさっさとその身体を手放しなさい」

現在鬼を取り囲んでいる符の属は木と相克する金となっている。
木鬼と同じく木の属を持つ久城標の身体にも多少負担はかかるかもしれないが、普通の人間が鬼ほど純粋な属を持つわけでもなし、鬼だけをあぶりだす方法としてはこれが正攻法だった。

が。

「……………！ 保健医、離れろ！」

「え？」

茨乃の忠告に、手鞠は一瞬出遅れた。
直後、青白い光が爆発する。

「きゃあッ！？」

爆風に煽られた手鞠はそのまま植え込みにまで吹き飛ばされた。

「……………子供騙しだな、こんなもの」

木鬼は息を吐きながら足元に落ちていたカードを踏み潰す。

「……っつー……………」

植え込みが逆にクッションになったのか、手鞠はそれに埋もれながらも苦々しく鬼を睨む。

「……………いけると思ったのに」

ぼそりとそうこぼしたのは紛れもない本心だった。

最新型であるカードタイプにも難があるのは彼女も知っていた。

1枚で全属性に対応しているというのはかなり重宝だが、その小細工が入っている分出力は札タイプに劣るのだ。

しかし通常の鬼　まして木鬼となればカードタイプで十分止められると踏んでいたのだが。

「どうやら相当そいつの身体がしつくり来てるみたいだな」

茨乃が前へと踏み出した。

鬼は肩をすくめて笑う。

「本当に良い依り代だよ、こいつは。もう数年熟せばつけ入ることすら難しかったかもしれないが、手に入ればこちらのもの。弱卒と云われ続けた我らに未来を」

「ひとつ言っておくぞ、鬼」

鬼の言葉を遮るように、彼女は殺気を放った。

「そいつは死ぬまで私のだ。貴様なんぞにくれてやるつもりはない」

その言葉に、鬼と、植え込みから抜け出そうとしていた手鞠は目を丸くした。

ただ啞然と。

しかしすぐに鬼は嗤った。

「触れられもしないくせに威勢のいいことを言うのだな、娘」

「……………」

顔をしかめた彼女に、畳み掛けるように鬼は言う。

「見えているぞ、その混沌が。今はどうにか均衡を保っているようだが、それも微妙なものなのだろう？」

手鞠はちらりと茨乃の顔色を伺う。

その表情は、とても苦い　いや、苦いと括ってしまえるほど単純なものではなかった。

苦悩、絶望、羨望、切望。

その湧き出るような感情を押さえ込むように、彼女はきゅっと瞼を閉じる。

それを嗤うように、鬼は続けた。

「お前が迎える最期はどれほどの苦痛に満ちているのだろうか？」

「
黙れ」

棘のような、碇のような、鋭利で重い声。

奈落よりも深い闇色の眼が、鬼を射抜いた。

が、鬼はそれを見て一層嗤う。

とても、可笑しげに。

「その怒りは恐れ of 裏面か？ それとも憧憬の片鱗か？ …… 良い、
実に良い！」

そう言い放ったかと思うと、鬼は俊敏な動きで茨乃との間合いを
詰めた。

「お前の顔が歪み歪むのを拝みたくなったよ」

鬼はそうこぼして茨乃の首へと手を伸ばした。

「瑞葉さんっ！」

手鞠の悲鳴に近い声が響く。

が、鬼の手は宙を掴むだけだった。

「！？」

「その言葉、お前にそっくり返してやるよ」

鬼の背後から、声が聞こえる。

「な」

鬼が振り向く前に、その肩を異形の手がガシリと押さえ込んだ。
そのまま彼の身体はうつ伏せに倒される。

「ッ！？」

馬乗りのような形になった茨乃は左手に息を吹く。

するとその掌に、極めて純度の高い『水』の気が宿った。

「こいつならともかく、貴様ごときは耐えられないだろうな」

そうこぼしたかと思うと、彼女はその掌を彼の背中に押し当てた。

「ッ!？」

鬼の身体が跳ねる。

「ああアアああああ!？」

嬌声に似た、しかし絶叫。

身体に流し込まれる純度の高い『水』の気に、鬼は悶絶する。

本来、木と水は相生の関係にあり、木にとって水は不可欠のものであるが、それを享受しすぎれば腐ってしまうのが道理だ。

それと同じで、例え本来糧となるべき属の気でも、格が違いすぎるものを一気に流し込まれてはその身がもたないということになる。

「ッ」

久城標の身体から、蒸発するように何かが飛び出し、霧散した。

一瞬で、形すら既になかったが、その何かがあの木鬼だということとは明らかだった。

それが抜け出た途端、くたりと久城標の身体から力が抜ける。

と同時に、茨乃もふらりとその横に腰をついた。

夜のグラウンドが一気に静まり返る。

「……終わった……」

手鞠はほうと一息ついてから、2人の元へと歩み寄る。

「お疲れ様、」

手鞠は茨乃にねぎらいの言葉を掛けようとしたが、すぐに彼女の異変に気がついた。

「……っ、……は」

必死に抑えようとしているが、息が荒い。

胸に握りこぶし状態で、顔もどこか青ざめていた。

「瑞葉さん、大丈夫なの？」

ことの重大さに気付いた手鞠は思わずしゃがみこんで彼女の顔を覗き込んだが

「構うな」

彼女はそれを隠すようにふらりと立ち上がった。

「……小夜」

か細い声で彼女がその名を呼ぶと、いつもの通り、傍らに白い女が現れた。

青白い髪、白い肌、そして金色の眼。

明らかに人間離れたその女が、いわゆる精霊と呼ばれる存在だと、手鞠にはひと目で分かった。

小夜は目の前にいる手鞠の顔と、その傍らでうつ伏せのまま横たわっている標を交互に見て首をかしげる。

「こっちの女はいいのよね？」

手鞠のほうを指差して、彼女は茨乃に尋ねた。

「そいつはいい。同業者だ」

茨乃が短くそう答えると、小夜はやや面倒くさげに脚を伸ばして、

倒れている標をごろりと仰向けに直した。

彼はまだ気を失ったままだ。

「……ん？」

その顔を見て、小夜は怪訝に眉をひそめた。

「ねえちよつと、茨乃」

「なんだ」

「これ、いいの？」

「何が」

小夜は苛立つてきたのかむんずと腕を組んだ。

「だからー、何度目よこの男の記憶消すの。偶然じゃないでしょ、これ」

「……え」

手鞠はそこで思わず声を上げた。

「記憶、消してるの？ 久城君の？」

手鞠の問いに、茨乃は答えない。

だんまりを決め込む茨乃に代わって、小夜が言った。

「あんたもこつちの人間なら知ってるでしょうけど、この手の件に一般人を巻き込んだ場合その記憶を消すのは当然のルール」

そのルールくらい、手鞠だって知っている。

けれど『記憶を消す』なんていうことは普通の人間には到底無理なわけ。

「事件の痕跡を抹消し『なかったこと』と思い込ませるか、もしくはその一般人をこちらの世界に引き込むか。普通はそのどちらかでしょう？」

手鞠がそう言うと、小夜は頷いた。

「まー凡人がとる手段なんてそれくらいしかないでしょうね。けど

私の場合人間の記憶操作が出来るから？」

関わった人間の記憶は直接消せるの、と。

少々自慢げに、彼女は言った。

「ねえ、でも待って。さっき『何回目』って言ったわよね？ それって何度も久城君が瑞葉さんの仕事に関わったってことよね？」

手鞠がそう尋ねると、小夜はそのまま茨乃のほうに視線を流した。「私が言いたいのもそれ。2回目までは偶然で済まされるとしても、3度も続くと流石にねえ？ 私としてもいちいち出てくるの面倒だし、いっそ」

「2度あることは3度あるって言うだろ。お前が楽しただけなのはバレバレだ」

茨乃がぴしゃりとそう言うと、小夜は不満げに目を細めた。

「言ってくれるじゃない。こっちだって好きであんたのお守りやっでんじゃないってこと忘れないでよね」

そう吐き捨てる、小夜は投げやりにその人差し指を標の胸辺りに向けた。

「え、あ、ちよつとま」

手鞠の制止も虚しく、見えない何かは彼の胸を射抜いていた。

E 3 - 6 : v s 木鬼? (後書き)

なんかこの話すごい難産で茨乃並みに息が切れました。

あとやっとタテ書き小説ネットの網にかかってほっとしました。
いつも読んでくださっている方々、ありがとうございます。

E 3・5：帰路

重い身体を引きずるように、少女はゆっくりと帰路を歩いていく。先刻、同業者である養護教諭に言われた言葉を思い起こしながら。

『記憶を消すって言っても、きっとそのうち綻びが出てくるわよ？ それに久城君は自分の体質を受け入れてる。その彼にそこまでする必要があるの？』

(……そんなことは、分かってる)
心の中で、茨乃はそうこぼした。

彼と夜に会ったのは、もう3度目。

まるで運命のように。

まるで、彼女が望んだみたいに。

しかし。

「……………ッ、またか」

前方にゆらりと浮かんだ影を見て、茨乃は憎らしげに悪態づいた。
心鬼　それも3匹。

「……………なんでこんなときに……………！」

茨乃は右腕を抑える。

今日はもう、それを使う余裕などなかった。

けれど鬼はゆるゆると彼女に近づいてくる。

その緩慢な動きですら、今の彼女には恐ろしく見えた。

「っ」

彼女は逆の方向へと駆け出す。
完全な敵前逃亡だった。

* * *

目を覚ますと、そこは学校の保健室だった。

「……………れ？」

窓の外は暗い。まだ夜のようなだ。

状況が掴めず、重たい瞼をこすっていると。

「おはよう、久城君」

覗きこむように、木村先生の笑顔が降ってきた。

「！？」

驚いて飛び起きると

「あたッ！？」

体中が悲鳴を上げるように軋んで、硬直してしまった。

「無理しちゃ駄目よ。貴方、鬼に身体を乗っ取られたとき相当人間離れた動きしてたから」

「え……乗っ取られた？」

先生の言葉に目を丸くする。すると先生は丸椅子に座って苦笑した。

「やっぱり覚えてないか」

「…………え、いや、俺…………」

「ああいいのよ、気にしないで。精霊の御技だもの、人智を超えた暗示くらい出来るんでしょうねえ」

先生はひとりなにやら感心したように頷いている。

「あの、先生」

「ん？」

「瑞葉のやつはどこ行ったんすか？」

俺がそう尋ねた途端、先生は目を丸くして固まってしまった。

「あの、せんせ？」

「……ってちよつとまでーい！ 何なの、君全部覚えてるの!？」
俺に掴みかかる勢いで先生は尋ねてきた。

「え、いやだつて、昨日逃がした鬼を捕まえるために2人が俺をぐるぐるに……」

俺がそこまで言うと、先生は浮かしていた腰をどかりと椅子に降ろし

「はめられたッ！」

それだけ悔しげにこぼして脚を組んだ。

「なんなの、記憶消せるつてのは嘘だったの？ まったく大人をからかうなんていい度胸してるわね、あの精霊」
ぶつぶつと愚痴をこぼしている木村先生。

「あのー、先生」

「ん？ ああ、瑞葉さんなら先に帰らせたわよ」
帰らせた？

「それってどういふ……」

「あーほら、質問はまた今度。君ももう帰りなさい。身体ガタガタでしょ？」

先生はそう言う俺をぱっぱと保健室から追い出した。

校舎の裏口から外へ出ると、いつの間にか雨がぱつぽつと降り始めていた。

天気予報なんて見るたちじゃないので、当然傘なんて持ってきて

いない。

俺は鞆を頭の上に抱えて歩き出す。

ふと校庭にある時計を見ると時刻は既に9時を回っていた。

よろりよろりと神木の夜道を歩いて帰る。

……それにしても脚が痛い。

筋肉が痛いのか骨が痛いのか、準備なしにマラソンを全力で走った後みたいな感じ。

この調子だと明日も響いているだろう。

ぐるぐる巻きにされたと思ったらいつの間にかことは全部終わってるし。

「……また瑞葉のやつ、なんの説明もなしに帰るんだもんなー」
これじゃあ巻き込まれた側としては納得できないというかしっくりこないというか。

「……………」

ふと、脚が止まる。

『ほんとに久城君は瑞葉さんのことが気になるのね』

先生に言われて、からかわれた言葉。

確かに自分でも、何かおかしいくらいに気になってる。

なんで？

そりゃあ確かに顔は好みだけど、中身は想像してたのと大分かけ離れてるわけだし。

いや、別に気の強い女が嫌いってわけじゃないけどあれは気が強

いというより口の利き方が乱暴なわけで。

昨日初めてまともに喋ったってのにいきなりあれだし。

まるで。

そう、まるで。

「……初めてじゃないみたいだ」

思わず口に出してそうこぼしたとき。

バシヤリ、と。

前方で大きく水が撥ねる音がした。

「？」

思わず顔を上げると、そこに見えたのは水溜りにうずくまる人影。状況からして、その背後にある金網のフェンスを飛び越えたのだろう。

そして。

「！」

そのフェンスの向こう側に見えるのは、鬼。

よろよると、しかし確実に、複数の鬼たちはそのフェンスをよじ登ろうとしていた。

「っ」

後ろを一瞬振り返り、うずくまっていたそいつは逃げるようにこちらに走ってくる。

しかし疲労しているのかその動きにもキレがない。

よく見ると……

「瑞葉!？」

逃げているのは間違いなく、彼女だった。

俺の声に驚いたのか、彼女はぱたりと立ち止まる。

長いこと雨に当たっていたのだろう、髪も制服も、全部ずぶ濡れだった。

「また説明もなしに消えたと思ったなら何やってんだよお前!？」

俺がそう言うとな彼女は見開いていた目をさらに丸くしたが、すぐ悔しげに目を細める。

「小夜のやつ……わざと消さなかったな」

そうこうしていたら後ろのフェンスをとつとう鬼が乗り越えてきた。

「っ」

瑞葉は戦おうとはせず、そのままこちらに逃げてくる。

が、3匹のうち最も身軽そうな小柄の鬼がフェンスを蹴って彼女に飛びかかるうとした。

「瑞葉、伏せる!」

俺が叫ぶと、彼女は反射的にその身をかがめていた。

鬼はそのまま彼女の頭上を通過して俺の方へと飛んでくる。

「こっちくんナッ!!」

とつさにかざした拳で殴り飛ばすと、鬼は傍らの電柱にぶつかって伸びた。

が、瑞葉はそれを見て苦い表情を見せる。

「……やっぱり消えない」

残りの鬼2匹もわらわらとこちらに寄ってくる。

瑞葉は右腕をかばうように抑えた状態で、全くと言っていいほど

戦意が感じられない。

「お前、今腕使えないのか？」

「……見て分かんねえかよ」

「……ですよねー。」

「なあ、じゃああの鬼はどうやってたら倒せるんだ？ 今日の鬼とはまた別物に見えるけど」

「あれは心鬼だ。人の心に棲む鬼。何かがきつかけで外に出てきたんだろぅが存在自体があやふやだから殴れば消えるはずだったんだ」……はずだった？

ふとさつき電柱で伸びていた鬼を見ると、そいつは既に立ち上がって再びこちらへ来ようとしている。

「殴つても消えてくれない！？」

「だからさつきから逃げてんだろこの馬鹿！」

「お前俺のこと馬鹿馬鹿言いすぎじゃね！？」

「何度も言わすなこの馬鹿！ 今はそれどころじゃ……」

俺たちが喚き合っていると、ゾンビみたいに鬼が迫ってきた。

「ああもおお！？」

情けない叫び声を上げてしまった、その時。

スパッと風が吹いたかと思うと、鬼達の身体に亀裂が入った。

「え？」

入ったかと思うと、あれだけ不気味だった鬼は跡形もなく消滅した。

「お前ら雑魚相手に何やってんだー？」

宙から幼い声が聞こえる。

見ると、そこには

「お前、木村先生が連れてきてた……………カマキリ？」

「か・な・き・りだっ！ 名前くらい覚えとけッ」

金髪の妖精みたいなガキンちょは、ぷかぷかと浮いたままふんと鼻を鳴らした。

「悪い、助かったよ」

こつちが頭を下げるとやつはすぐ機嫌を直したようだった。

「にしてもお前ら、心鬼相手に何やってんだよ？ このド素人っぽい兄ちゃんならともかく瑞葉の姉ちゃんなら余裕だろ？」

金髪のカギは心底不思議そうに瑞葉に尋ねた。

「……………」

瑞葉は渋い顔をして黙ったままだ。

というより、顔色が悪い。

もともと色白な奴だけど、今はなんというか、血の気がないというか。

このまま放っておいたらそのうち倒れそうだ。

「おい瑞葉、大丈夫か？」

俺が尋ねると、答えたのはなぜか金髪のカギで。

「兄ちゃん、そこは『大丈夫か』って訊く前に『俺の部屋に来いよ。温めてやるから』、だろ？」

「……………」

「……………」

瑞葉と俺は思わず沈黙した。

「ちょッ！？ なんだよお前ら白い目でこつち見んなよ！ 俺なん

か間違ったこと言ったか!？」

顔を真っ赤にするガキンちょは確かにガキンちょなんだが、なん
つーか、発想が古い。

古いつつーか今時ねえよそんなキザな台詞。

まあ、キザ台詞とか下心とかはこの際置いておいて。

「俺ん家近いから寄ってけよ、瑞葉」

俺が声をかけると、瑞葉は視線を足元にやってじっと考え込み始
めた。

……………その間が、長いなんの。

ちよつと待て!

俺ってそんなに信用ないのかッ!?

「別に変な意味で言ったわけじゃないぞ!? お前服びしょ濡れだ
しせめて服乾かして傘持つて帰れよ的な意味であって特段あーだこ
ーだなんてなんにも、これっぽっちも考えてないからなッ!？」
ってなんか余計なこと口走ってないか俺!?

しかし。

「んな心配誰もしてねえよ」
ぽつりと、瑞葉は言った。

嫌味とか、そんな余分な感情はその声音からは全く感じられず、
本音だということがよく分かった。
よく分かったから、むしろ。

「お、兄ちゃん顔赤くなってるね?」

ガキの冷やかに余計に顔が赤くなった。

「るせっ!」

俺が吼えろと奴はけらけらと楽しそうに笑ってあさっての方向へと飛んでいった。

どうやら本当の主人の元へと帰るらしい。

「……で、どうすんだ？」

照れを隠してわざと視線を合わせず尋ねると、瑞葉はふいと俺の脇を横切った。

「え、あ、ちょ、帰るのか？」

慌てて彼女の背中に声をかける。
すると。

「お前ん家にな」

彼女ははっきりと、そう言った。

E3・5：帰路（後書き）

お久しぶりです。

サイマガ改訂も終わったのでこちらの連載に集中したいと思います。
どうぞよろしく願います。

E 4：波乱のミッドナイト

「……散らかつてんな」

俺の家に上がっての、彼女の開口一番はそれだった。

「リビングは俺の部屋よりまだマシだ!」

何せ俺の部屋は足の踏み場がないからな!

「威張るな」

「へい」

……とまあ瑞葉を俺の家　もといお袋が親戚筋から格安で借り
ている築15年の一軒家　に連れてきたわけだが。

「……」

瑞葉がなんだかきよろきよろしている気がする。

「風呂ならあっちだぞ」

「それくらい水の気で分かる」

さいですか。

「じゃあ何きよろきよろしてんだよ」

「……この家、なんかいるぞ」

「え?」

「風呂借りるぞ」

「つておい!　意味深な台詞残して行くなよ!」

瑞葉は俺の言葉を見殺しして脱衣所へと消えていった。

「……………」

まあ、ずぶ濡れのまま待ってても仕方ないし俺も着替えるだけ着
替えとこつ。

その辺に置いたままだった洗濯済みの着替えを引き寄せて、雨で

べつとりと張り付いた上着とズボンをもそそと脱ぐ。

パンツ一丁になってから、身体を拭くタオルを用意していなかったことに気が付いた。

置きっぱなしの洗濯物の中にタオルの姿はない。

「つれー、どつかなかったっけ」

頭を掻きながらくるりと身体を回転させると。

「……………」

なぜか、そこに瑞葉がいた。

「わあ！？　なんでまだここにいるんだよ!？」

「……タオル。脱衣所になかったから……」

彼女はどこか気まずげに視線を逸らした。

「……なんか、瑞葉の奴赤くなってるないか？」

「……………」

フ、そうかそうか。俺の肉体美に見惚れ……

「ぶフッ!？」

「早くなんか着ろこのタコ!！」

リモコンが顔にぶち当たった。

* * *

「まだ顔痛いんですけど」

「お前が馬鹿なこと言うからだろ。とつとと制服乾かせ」

「……………」

反論できず鼻をさすりながら彼女の制服にドライヤーをかける。

しかし制服つてのは乾きにくいな。

ちらりと壁の時計を見る。

時刻は1時ちよつと前。

普通の女子高生が出歩いていい時間ではないだろう。

「……なあ瑞葉」

「なんだよ」

「泊まってくか？」

「……………はあ！？」

跳ねるように立ち上がる瑞葉。

「いや、深い意味はないんだけど」

「あつたら殺してる」

「ですよー」。

「じゃあ送つてやるよ。お前の家つてどの辺？」

「別にいい」

「せっかくこの神木町のオオカミ様を送つてやるって言ってるのに」

「だからなんなんだよそのダサイ異名。つかこの文脈で使う名前じゃねえだろそれ」

「？」

「……もういい。馬鹿は黙つてろ」

「ああ、送りオオカミって意味か」

「おせえよ」

「俺そんな男に見えるか？」

「見えねえな。馬鹿すぎて」

そう言ってから、瑞葉はたと口を押さえた。けどもう遅い。

「だったらいいだろ？ 送つてやるよ」

ようやく乾いた制服を、俺は彼女に手渡した。

* * *

深夜。

にわか雨だったのかすっかり雨は止んでいて、空には星が瞬いていた。

なんだかその空が、少しだけ懐かしい。

昔は夜出歩くことが多かったから、よくこんな空を見ていた気がする。

気がつけば、彼女も時折空を見上げていた。

鬼を退治する彼女も、きっと夜中に散歩することが多いのだろう。

「なあ、お前は鬼を退治していつてどうするんだ？」

「……いきなり重い質問すんな」

「重かったか？」

「ん」

苦笑する。

どうも俺は空気が読めないらしい。

「……どうするも何も、終わりなんてないからな」

瑞葉がぼつりとそうこぼした。

「久城。なんでこの地が神木町っていうか知ってるか？」

「えーと。でつかい神木があつたからだろ？ でも大分前に落雷で焼けちまつたらしいってばあちゃんが言ってた」

瑞葉は頷いた。

「よくある話だが、その神木が長いことこの町の結界になってんだ。気高い数多の精霊を呼び寄せ、邪悪な鬼を寄せ付けない、そんな感じの」

「……へえ。じゃあ、木が折れたせいで鬼が現れるようになったの

か？」

「神木があつた頃も結界を破ってくる鬼はいたそうだが、木がなくなつてからは数が増えた。だからうちの家は鬼退治に力を入れたんだ」

瑞葉は一息つく。

「新しい神木でも出来ない限り、うちの家系はずっと鬼を相手にしていけないといけない。終わりはない。……笑えるだろ？」

笑えるだろ？　なんて言うわりに、顔が笑ってない。
そもそも笑えないし。

「鬼退治が嫌ならやめたつていいんじゃないか？　木村先生みたいに進んで仕事にしてる人たちだつているんだろ？」

俺が言つと、瑞葉は肩をすくめた。

「うちの馬鹿姉はやめて家を出てつた」
「なら」

瑞葉は笑つた。

寂しげに。

「私の場合は、無理なんだ」

絶対に、無理なんだと。

彼女の表情が、そう告げている。

何か気の効いたことを言わないと。

そう考えて口を開こうとしたその時、爆音が聞こえてきた。
バイクの音だ。

個人的には懐かしい音だが、今思うと迷惑な音だ。

「……最近家の近くで馬鹿な連中がたむろつてんだよな。お陰で眠りにくいったら」

瑞葉はさも迷惑ですといった顔で俺のほうを見た。

「なんで俺のほう見るんだよ！俺が抜けたところはもう潰れたって聞いたぞ！」

「どうせ知り合いだろ？　なんかガツンと言って来いよ神木町のオカミ」

「こういつときだけその異名で呼ぶな！」

ブーン。

しかし。

ブルルル。

なんか。

ブルンブルンブルン！

バイクの音、近づいてきてないか？

「……あーあ」

瑞葉が諦観の境地のような声を上げた。

路地の向こうから、複数のヘッドライトがやってくる。

先頭には派手に改造されたオートバイ。

その後ろについてきているのは……全部ピンクのスクーター。

「……レディースか？」

ライトの眩しさに目を細めていると、そいつらは俺たちの前で一斉に止まった。

「こんな夜中にデートたあ見せ付けてくれんじゃねーの」

猫モチーフのなんとなく可愛らしいヘルメットを被ったヘッドらしき女がバイクから降りる。

白の特攻服には、赤い文字で『羅武危機』と書かれている。

「アタイの前でイチャつくなんざ10年早いだよオ!!」
どすの利いた声を発し、女がそのメットを取った。

金髪ショートが風に揺れる。

特攻服スタイルこそあれだが、顔は美人だった。

俺と目を合わせた途端、女はつり気味のその目を大きく見開く。

「……お前、神木町のオオカミ……!？」

女がそうこぼした途端、周りの子分がざわつきだした。

「オオカミってあの……?」

「隣町の最強番長を負かしたっていうあの……」

「ひ、ひと晩で神木町の女100人を抱いたっていうあの……!？」

抱いてねえええー!!!

誰だよそんな噂流したの!!

「……久城。めんどいからここでバイバイな」

瑞葉はうんざりした顔をしてさっと離れていく。

「なッ!? おいちょ!」

「……待ちな」

俺が止める前に、瑞葉を止めたのは金髪ヘッドだった。

「お前か? 神木町のオオカミをたらし込んで骨抜きにしたってえ
女は」

「……………」

瑞葉はげんなりと、死んだ魚のような目で金髪ヘッドを見た。

「なんだその目は？ やる気か、アア！？」

命知らずにもすごいメンチを瑞葉に切る金髪ヘッド。

「ちょ、ちよつと待てよ！ そいつ関係ないからマジで！」

俺が止めに入ると、金髪は鬼気迫る勢いで睨んできた。

「おいコラてめえ！ 天に昇る竜のごとくその名を町中に知らしめたくせに今じゃそんななっさけないツラ下げやがってよオ！！ お前に憧れてた奴らがどれだけ落胆したか分かるか、アア！？」

「……お前もそのひとりつてか」

瑞葉がはんと鼻で笑うと、金髪ヘッドは顔を真っ赤にした。

「なっ！？ そ、そんなわけないだろッ！ こここのわたしがそんな」

……一人称改まるくらいには動揺してるな。

俺って昔はモテてたのかなー。実は。

「と！ とにかく！！ お前は一発殴らないと気がすまねえ！！ 覚悟しなッ！！」

金髪ヘッドがそうまくし立てた勢いで瑞葉に殴りかかった。

それをスイ、と軽くかわす瑞葉。

「っ、只者じゃねえな！？ どうした、かかって来いよ！」

挑発をかける金髪ヘッド。

「……」

瑞葉は黙って拳を避け続ける。

それに痺れを切らしたのか、金髪は大技に出た。

「……いい加減にしなッ！！」

まるでラグビーみたいに、瑞葉の胴に掴みかかる。

「！」

流石にそこからは逃れられなかったのか、瑞葉は押し倒されてしまった。

が。

「うッ!？」

次の瞬間には、金髪が宙で1回転して仰向けに倒れた。

「……………は!？」

周りの子分たちは目を見張っている。

速すぎて何が起こったのか見えなかったのだろう。

かろうじて俺の目が捉えたのは瑞葉の足技。

倒された時の勢いを利用してそのまま相手を蹴り上げたのだ。

「……………くう」

金髪ヘッドは負けを認めたのか仰向けのまま動かない。

一方瑞葉は地に片膝をついて、またしても汚れてしまった制服を残念そうに手で払っていた。

すると。

「……………よくも……………よくも姐様を————!!」

子分のひとり（しかも大人しそうな子）が血走った眼で鉄パイプを手に瑞葉に襲い掛かった。

「マミ!?! やめな!!」

慌てて金髪は制止したが、その声すら彼女の耳には届いていないらしい。

「うわああああああ!」

ああもう昼ドラかよ!?

とつさに身体が前に出る。

次の瞬間

ガッン、と。

肩に衝撃が走っていた。

E 4：波乱のミッドナイト（後書き）

更新速度遅くてすみません。

新エピソードに入りました。

いつも読んでくださっている方々、ありがとうございます。

E 4 - 2 : 波乱のミッドナイト？

「……………ってー」

肩がじんじんする。

痛いというより痺れる感じ。

まあ、女子の腕力じゃこれくらいか。

「……………」

すぐ目の前の瑞葉は、目を丸くしていた。

何が起こったのかまだ理解できていないような顔だ。

「……………あ」

カランと、鉄パイプが地に落ちる音がした。

と同時に、

「マミ！　なんてことするんだ！」

ぴしゃりと、金髪ヘッドの怒声が響いた。

「……………う、だって、姐様が負けるなんて……………許せなかったから……………」

「負けは負けだよ！　相手の油断を狙って鉄パイプで殴りつけるな

んて言語道断！」

「……………うううう」

「泣いても駄目！！　今度やったら出てってもらおうよ！」

「うわあああんそれだけは嫌ですうううううう」

……………なんだあれ。

俺が呆けていると、金髪ヘッドが俺と瑞葉の前に正座した。

「……………すまなかった。うちのもんが卑怯な真似をして」

そして、頭を下げる。

完全に土下座だった。

「……いや、別に。怪我は特にないし……な？」
俺が瑞葉のほうを振り返ると。

「……………」
なぜか、彼女はすごく不機嫌な顔をしていた。
それこそ世界が終わりそうなくらい。

「……当然か。自分の男が殴られていい気になる女なんていないからね」

金髪ヘッドは勝手にそう悟っているが

「誰が、誰の、男で女だ」

瑞葉はより一層不機嫌にそう吐き捨てて立ち上がった。
俺も慌てて立ち上がる。

「あ！ ちょっと待ってくれよ！」
するとやっぱり、金髪ヘッドが呼び止めた。

「まだ何かあるのか？」
出来ればさっさとこの場を離れたい。
結構な爆音だったから、下手すると警察が来るかもしれないのだ。

が、彼女はどこか切羽詰った顔で俺たちを見つめていた。
そして。

「お前達に、頼みがあるんだ」

* * *

娯楽施設が極端に少ないこの街にも、昔はカラオケボックスというものが存在していたのだ。

けどそれも3年ほど前に潰れた。
確か1年と持たなかったと記憶している。

その潰れたカラオケの建物が未だ取り壊されずに放置されていたのは知っていたが、まさかそこがレディースのたまり場になっていたとは。

「まあ座りなよ」

旧カラオケのフロントにあるソファーに、言われるまま俺は腰掛けた。瑞葉はというと腰は下ろさずソファーのへりにもたれて腕を組んでいる。

金髪ヘッドは一瞬苦笑したが、すぐに本題に入った。

「実はね、今うちのもんが1人悪い男に引つかかってんだよ。それをどうにかしたいんだが……」

「ってなんだよそれ。めっちゃ内輪ごとじゃないか」

思わず手も入れてつつこむと、いやいやと金髪ヘッドは頭を振った。

「私だって普通ならこの程度のこと、直接出向いて何とかするさ。けど今回は相手がね……」

……？

「相手が相当強いのか？」

「……ん、まあそれもあるんだが……それだけじゃなくて……」

金髪ヘッドはどこか言葉を濁す。

言つのを躊躇っているような、照れているような、なんとも言えない表情だ。

「なんなんだよ？」

促すと、彼女の後ろにいた子分の女が顔を赤くして言い放った。

「あいつ、ヤバいくらいイケメンなんだって!!」

.....は？

呆氣にとられてる俺をよそに、口々に喋りだす女たち。

「ほんと、チヨーやばいんだって！ 見られただけで子供できそうなくらい！」

いや、出来ないだろ。

「あいつの周りいつつも女がゴロゴロしてんだよ！ 何人も侍らしやがってムカつくっつーかそれを通り越して混ざりたいっつーか」

「ちょ、ミユキてめえ何言ってやがんだよ抜け駆けする気か！？」

「るせつ！ アンタこそ前からメグのこと羨ましがってたじゃねーかよ！」

.....。

.....。

「.....てなわけさ。女だといつもこいつもこんな風になっちゃうから困ってるんだ」

金髪ヘッドは溜め息混じりにそうこぼした。するとどこからか例の鉄パイプ女がモップを持って現れた。

「大丈夫ですわ姐様！ マミは男に興味なんてありません！ 姐様だけを想って生きてますわ！」

「.....マミ、罰のトイレ掃除まだ終わってないだろ？」

「.....はい」

しょんぼりとした背中に戻っていく鉄パイプ女。

ってかさっきのはさっきので何か問題なかったか？

「とまあ真面目な話、私とマミくらいしかまともに動けないわけだよ。あの優男、腕も相当立つみたいでね、過去に女を寝取られた男共が何人も挑んだらしいんだが、どいつもこいつも振り返ちにされ

たとか」

……ま、まじか。

ひでえ。まじでひどいなそれ。

「分かった、俺でいいなら協力するぜ」

ていうかどれくらいイケメンなのかいっぺん見てみたい。

そして一発殴りたい。

三次元にハーレムなんて存在してたまるかコンチクショォー！

「ほんとか！？ ありがたいよ」

金髪ヘッ드의顔が綻ぶ。

……意外だが、笑うと結構幼い顔になる奴だ。厚化粧なせいかな
齢が読めないが、もしかしたら俺たちとそんなに変わらないのかもしれない。

「あんたはどうだい？」

金髪ヘッドは期待の眼差しで瑞葉の答えを促した。
が

「パス」

彼女はただ一言そう言って、踵を返した。

「え、ちょ、瑞葉！？ 殴りたくないかそのハーレム男！ 女として！」

「知るか。大体な、相手がどんな奴だろうが溺れるのはそいつの自由だろ。他人がとやかく言う筋合いはない」

瑞葉はそっけなく、しかし諫めるようにそう言った。
が

「……確かにそうかもしれない。けど私は、ダチが悪い男にひっかって弄ばれるのは我慢ならないんだよ」

金髪ヘッドはそう言い切った。

両者、しばしにらみ合う。

まるで虎と龍みたいだ。

ちなみに虎は金髪のほうね。黄色いから。

「お、俺も金髪の見解に賛成……」

「馬鹿なガキは黙ってろ」

「馬鹿なガキ!？」

「他人の色恋沙汰に踏み込めるほど経験ねえだろ」

「あ、あるし! あるもん!」

しかしやっぱり瑞葉には鼻で嗤われて。

「もう1度言うぞ、金髪。ダチだかなんだか知らねえけど、要するにそいつはお前らをほっぽらかしてその男に走ってんだろ? そんな奴を連れ戻す価値があるのか?」

瑞葉は金髪に問う。

金髪は一瞬、顔をこわばらせた。

が、すぐに口元を緩める。

「……あんた、ダチがいないタイプだね」

「……うつわー、すごいこと言うなー」。

まあ確かに瑞葉ってクラスでも浮いてるけどさー。

ラブクライシス

「私は最初から、羅武危機のメンバーとしてあの子を連れ戻すつもりはない。メグは中学ん時からの親友なんだ。それだけだよ」

それを聞いた瑞葉は

「……勝手にしろ」

それだけ言って、建物から出て行った。

「悪かったね、オオカミ。私は別にあんたを拘束するつもりはないよ。あいつみたいにパスしたっていい」

「い、いや！ 男に二言はない！ 俺は手伝う」

すると、金髪はほっとした笑みを見せた。

「そうかい。……正直ちよつと不安だったんだ。あんたがいてくれて助かるよ」

俺のことを信頼しきつてる、そんな笑み。

「お、おう」

……なんか照れるじゃねえかよくそう。

こいつのスマイル、木村先生と案外良い勝負かもしれん。

照れ隠しに、瑞葉が出て行った出口のほうをふと眺める。

「……瑞葉の奴、きびしいよな」

「そういう奴なんだろ？ あいつの言うことも筋は通ってるから、別に恨みはしないけどさ」

でも、何か少し引つかかった。

あいつなら、手伝ってくれそうな気がしたんだ。

なんでそう思ったのかは、自分でも分からないけど。

* * *

「おかえりなさい！ 茨乃姫さま！」

深夜 それも明け方近く、そんな時間に帰宅した主人を、それでも彼は笑顔で出迎えた。

「まだ起きてたのか、アンリ閨里」

「はい！ 僕はここから動けないので、せめて姫さまがお戻りになるまでは起きていようと、姉さんと一緒に深夜番組を鑑賞しながらお帰りをお待ちしてました！」

閨里と呼ばれた青白い髪の少年は、眠気を全く感じさせないハツラツとした表情で答えた。

おそらくは教育上よろしくない目の冴えるような番組でも見ていたのだろうが、茨乃はあえてそこには触れず、

「なら小夜も起きてるんだな」

「え、あ、はい。リビングにいますけど……」

それだけ聞いて、彼女は真っ直ぐリビングへと向かった。

「おい、このクソ馬鹿女」

部屋に入るなり、彼女はそんな言葉を吐き捨てる。

「あんたさー、仮にも瑞葉のお嬢なんだからさー、その言葉遣いなんとかならないわけー？」

そう返す女も女で床にだらしく寝転がっていた。

寝転がっているだけならまだしも女の服は妙ちくりんながらも和装だ。そんな格好でだらだらと床に寝転がれば着崩れるのは当然で、脚はおるか胸まで大いにはだけてしまっているが本人はとんと気にしていない。

「なんで命令を守らない」

「だって別に私、あんたの守護精霊でもなんでもないしー」

「お前達の本体は瑞葉の家にあるんだぞ」

茨乃が低い声でそう言うと、小夜は薄く嗤った。

「脅そうったって無駄よ？ あんたの父親は中途半端なところで私たちを壊せない。私には役目があるもの」

茨乃は溜め息をつく。

「……お前にとったら今の状況のほうが都合なんだろうな」

再びごろりと転がって、小夜は茨乃を見上げた。

「苦しい？」

無邪気な顔で、彼女は尋ねる。

「……………痛いよ」

茨乃はそのまま自室へと足を向けた。

「あ、あの！ 茨乃姫様！！」

自室に戻ろうとした彼女を、闇里が呼び止めた。

「あの……姉さんが勝手なことしたならすみません。僕が謝ります」
「謝るくらいならお前の馬鹿姉を私の言うとおりに動くよう説得してくれ」

半ば諦観が籠もった溜め息を吐きつつ茨乃が言うと

「それは、無理です」

遠慮がちなが、しかしはつきりと彼は答えた。

「姉さんと意図は違うかもしれないけど、僕も彼の記憶は置いておいてほしい、です」

「……………なんで」

「きつと、そのほうがいいからです」

「答えになってない」

会話を打ち切るように、茨乃はボタンと扉を閉めた。

やれやれと、茨乃はベッドに横になる。

今日はもううんざりだ。

無理はしたし、ずぶ濡れるし、変な女と乱闘になるし。
それに。

「……………いちいち厄介なことに巻き込まれてんじゃねーよ、馬鹿」

ここにいない相手に、彼女は秘かに毒づいた。

E 4 - 2 : 波乱のミッドナイト? (後書き)

更新遅くてすみません(いつも言ってる気がする)

もうちょいスピードアップできるよう頑張ります(当社比)。

いつも読んでくださっている方々、ありがとうございます。

E 4 - 3 : 疾走バッドモーニング

眠い。

超絶、眠い。

「今日はいつにも増して眠そうだな、久城」

脇谷がいつもの通り突っ込んでくれる。

「昨日はいろいろあつてな」

すると脇谷は目を輝かせて訊いてくる。

「お、なにに。元カノが復縁迫って家に押し付けてきたとか？」

それで一晩中眠らせてくれなかったとか？」

「どんなだよ。てか脇谷、だるそうにしてる俺を見てお前はいつも何を想像してるんだ」

「熱い夜。甘い吐息」

「……お前結構ロマンチストな」

「男って皆そんなもんだろ」

「まあな」

……しかし今日はマジで辛い。

結局昨日はほとんど一睡も出来ていないのだ。

といつても脇谷が言うような男女のあれこれがあったわけでもなく、単にあの金髪ヘッドと例のイケメンをどう潰すかという計画を練ってただけで。

「あーもう無理！」

もう少して授業開始だが、あまりにも瞼が重いので思い切って席を立った。

「あれ、ばつくれんの？」

「保健室にな」

普段の天使な木村先生なら1時間くらいベッド貸してくれるよな？
と期待しつつ俺はふらふらと教室を出た。

* * *

「あら久城君。おはよう」

漂うのは優雅な紅茶の香り。

保健室に入ると、木村先生がちょうどマグカップに口をつけようとしていたところだった。

1限目開始のチャイムが鳴って、部活の朝練で怪我したただのなんだのと訴える連中のラッシュが終わった後のティータイムなのだろう。

「久城君も紅茶いる？」

「んー、頂けるなら……」

うつらうつらと頭を揺らしつつ答える。

「やけに眠そうね。昨日遅かったの？」

「んー、あれから色々あって……」

ああ、喋るのも億劫になってきたぞ。眠気がやばい。

「色々？」

しかし木村先生は気になったようで掘り下げるように尋ねてくる。
回転しない頭で俺は断片的に言葉を綴った。

「瑞葉と会って……濡れてて……風呂入って……もみ合いになって

……一睡もできませんでした……」

「？　え、なにそれ寝たの？」

「……いや、だから寝てないんですってば……」

……ぐう。

* * *

次に目を覚ましたときには、半刻ほど時間が経過していた。

「死んだように寝てたわね」

俺の顔を見て苦笑する木村先生の手には、目覚まし用の缶コーヒ
ーがあった。

「はいこれ。どうぞ」

「あ、あつぎーす！」

短期集中で眠ったせいか頭がさっぱりした気がする。

これでこのコーヒーを飲めば今日１日はなんとか凌げそうだ。

「で？ 濡れた瑞葉さんとお風呂に入ってもみ合いっこになって一
睡も出来なかったってどういう意味？」

「ブハッ！？」

「な、なんすかそれ！？」

「あら久城君が言ったんじゃない」

「言ってますん！ てか言ったかもしれないけど妙に超訳してませ
ん！？」

「あらバレた？」

「てへ、と舌を出す木村先生。」

この仕方のない先生に、俺は昨日の出来事を一部始終話すことにな
った。

「 それ、鬼ね」

俺の話が終わった後、木村先生はぽつりとそう言った。

「そうそう。昨日の瑞葉、金髪にダチを見捨てろみたいなこと言っ
て鬼みたいだったなって」

「じゃなくて。その男がよ」

「へ？」

どういうこと？

「俗称色鬼。夢魔が形を成したようね」

木村先生は少し深刻そうな顔で俯いた。

「いろおに？ むま？」

「淫魔って言えば久城君にも分かるかしら？」

「……う」

笑顔でそれ言うのずるいなあ。

……いや待てよ？

「つてことは、素人が挑んで勝てる相手じゃないってことっすか？」

「そうね。正直無理ね。絶対無理ね」

「う」

「だから瑞葉さんも止めたんでしょうけど。でも結局止められなかったってことは……」

ふと、木村先生は苦い笑みを見せた。

「瑞葉さん、今朝教室にいた？」

「……！」

眠くてふらふらしてたからあんまり見てなかったけど。

教室の隅、彼女の席は

「……空いてた」

気付けばよかった。

もっと早く。

だってあいつ、昨日本調子じゃなかったのに。

慌てて保健室から出ようとする俺を

「ちょっと待った久城君！」

木村先生が声を張り上げ制止した。

「言ったでしょう？ 素人の貴方が行っても返り討ちに遭うだけよ」
先生にしては珍しく、真摯に棘のある言葉。

「でも……」

「中途半端な気持ちで鬼に関わっちゃ駄目。どうしても関わりたいのなら君は覚悟を決めないと」

先生の眼が俺を見透かしている。

俺には確かに、『覚悟』がない。

幽霊とか、鬼とか、存在こそ否定はしなくなったものの、積極的に関われる自信はない。

だって、それは恐怖の対象だったから。

けど、なんでだろう。

鬼の腕を持つ瑞葉を、恐れることはなかった。

それを思うたび、ふと考えるんだ。

俺は、彼女をもっと深く知ってたんじゃないかって。

「俺やっぱり気になるんで行きます」

「駄目って言ったら？」

「それでも行きます」

「……言っじゃない」

「んじゃ！」

先生にびしりと敬礼して、俺は下駄箱へと急いだ。

* * *

「姐様、姐様。オオカミとの待ち合わせは夕方ですよ？ いいんですか、もう乗り込んでやって」

「乗り込むんじゃないよ。あくまで偵察さ」

まだ空気も澄んでいる平日の朝。

電柱の隅に隠れるように、2人の女が佇んでいる。

神木町の新星レディース、ラフクライシス羅武危機のヘッドとその子分だ。

普段なら彼女らも学校に通っている時間なのだが、決戦日である今日は勉強など手につくまいと、応援を求めた久城標と落ち合う前から敵の偵察にやってきたのだ。

「……しかし相変わらず趣味の悪い屋敷だねえ」

金髪ヘッド　もとい倉井愛子は憎憎しげに敵の本拠地を見上げた。

ひと言で表すと、そこは豪邸。
もしくは幽霊屋敷。

「聞いたことがあるんですけど、この屋敷ってどっかの国の変な芸術家が建てた家で、その芸術家が発狂して自殺して以来誰も寄り付かなくなったのに、ある日突然どっかの物好きが買い取って、今はあいつが住んでるんだとか」

「いかにもな話だねえ」

門が、そもそも悪趣味なのだ。
言ってみれば地獄の門。

建物を飾るものは全て悪魔やらなにやら、そういったブラックなイメージのものばかり。

「……なんでこんな屋敷に住んでるような奴にハマッちまうんだか」

愛子が深い溜め息を吐いた、その時。

ガシャン、と。

屋敷の中から派手な音が聞こえた。

「!？」

「なんの音ですかね？」

ガラスが割れるような音にも聞こえたが、それにしても音が大きかった。

もっと大きなものが壊れたような、そんな異音。

「中で何か起こってる……？」

* * *

「ああ。その装置高かったんだけどね」

男は微笑を湛えつつも、決して笑わない眼で彼女を見た。

目の前にはベッドほどの大きさの円盤型の装置が見るも無惨な形に破壊されている。

「現代の夢魔つてのは堕ちたもんだな。こんな機械に頼らないと本領を発揮できないのか」

破壊した当人 瑞葉茨乃は冷やかな視線を男に返す。

男の周りには数人の女が転がっていた。

装置による幻覚の作用が切れて気絶しているのだ。

「確かに、私は本来形を持つべきものではないもの。ゆえに形を得て以来制約も加わった」

夢魔とは本来、人間の夢に現れる形なきもの。

形がないからこそ人間の夢に現れることができると言える。

つまり、形を持った時点で人間の夢には入ることができない。

それを擬似的に可能にしたのが、人間に幻覚作用をもたらすこの円盤型の装置だったというわけだ。

「だったら貴様はどうして形を成した？」

茨乃の問いに、男は一瞬複雑な笑みを見せた。

「それは言わない約束でね」

「……約束？」

「レイディ、お喋りはおしまいだ」

そう言い放った途端、男の姿がブレた。

「！」

目前に迫った男を振り払おうとするも、男の想像以上の怪力に鬼の腕は阻まれた。

「ッ」

男は彼女の耳元で囁く。

「そつえば伝えていなかったね。多人数の相手を一気に墮とすにはあの装置が必要なんだが、1人くらいならこの眼でどうにかなるんだよ」

「！？」

「君は芯が強そうだから、きっと良いものがとれるだろう」

逃れる術はすでになく、鬼と彼女の視線がぶつかった。

E 4 - 3 : 疾走バッドモーニング (後書き)

敵に関して、この題材で全年齢対象のまま乗り切れるかが今回の試験です（ ）。

次話こそマシな更新頻度で行きたいと思います頑張ります。

いつもめげずに読んでくださっている方々、ありがとうございます。

E 4 - 4 : 特攻ホーンテッドハウス

俺が全力疾走でイケメン男の屋敷前に辿り着くと、そこには既に金髪ヘッドと鉄パイプ女がいた。

「なんでお前らここにいるんだ!？」

「それはこっちの台詞だよ! まだ昼間じゃないか」

俺がこの時間に来るとは思っていなかったのだろう、金髪は目を丸くしているが、それとは別にどこかそわそわしているのが分かった。

「何かあったのか？」

「いや、ちよつと前屋敷の中から変な音が聞こえてさ」

「変な音？」

「がしゃーんって感じの派手な音でしたよ」

瑞葉の奴、もう乗り込んでるんだ。

「お前らここに残ってるよ、俺、中見てくるから!」

「え、ちよつとオオカミ!？」

屋敷の門に鍵はかかっていない。

何を考えることもなく、正面から入ることにした。

色んな意味で趣味サイアクな玄関扉を開け放つ。

広がったのは無人のロビー。

「おい! 瑞葉ー!!」

呼んでも彼女は返事などしないだろうが、それでもこの屋敷の中にいれば俺が来たことが分かるだろう。

「……て」

分かったところで何がどうなるんだ！？
ていうか俺は何をしたらしいんだ！？

「やっべ考えてなかった！」

思わず入ってきた扉のほうを振り返ると

「何を考えてなかったって？」

「まさか作戦もなしに乗り込んだんですかー？ 頭わるーい」

金髪ヘッドと鉄パイプ女がそこにいた。

「ちょ、お前ら入ってくんなよ！」

「はあ？ 昨日の段取りじゃあ3人でリンチかけようって話だった
じゃないか」

「フルボッコの練習だっと思ってきたんですよ？」

確かにそうだったけど！

「だから！ 事情が変わったんだって！ いいか、よく聞けよ……」
2人を説き伏せようと言葉を探すが、気の利いた嘘が思いつかない。
い。

相手は人間じゃないなんて言っただって、こいつら絶対信じないだ
ろっし……。

「どういうことさ？」

「はつきり言ってくださいよ」

2人が段々と痺れを切らしてきたのが空気で分かる。

「だから」

俺がもたもたしていると。

「今日は客人が多いな」

静かなロビーに、低い男の声が響いた。

「！――」

正面の階段からゆつたりとした足取りで降りてきたのは白いスーツ姿の優男。

キザったらしい格好だが、それを着こなせるだけのプロポーズを十分に兼ね備えている。

時代錯誤なオールバックのくせにそれがこの上なくカッチリと似合っているものだから何も言えない。顔もこれまた憎たらしいくらいに整ったパーツが貼り付いていて、正直絵画かなにかを見ている気分になる。

要するに。

「確かにイケメンって言われるのもわかりますけどー」

オトコニキョウミナイ発言をしていた鉄パイプ女ですらも悔しげにそうこぼしたほどのものだ。

「お褒めに預かり光栄だよ、レイディ？」

れ、れいでい？

「ほ、褒めてないですー！ 姐さまこいつきもいー!!」

鉄パイプ女は逃げるように金髪ヘッドの後ろに隠れた。

「ちよつとあんた！ 町中の女をたぶらかして何のつもりだい？」

金髪ヘッドは一步前に踏み出して叫んだ。

「たぶらかす、とは人聞きの悪い。私はただこの町の女性の満たされない心を埋めているだけなんだけどね」

男はわざとらしく肩をすくめた。

「は！？ とにかくうちのメグを返してもらっよ！ どこにいるんだいー!!」

「メグ……ああ、あの子か。あの子なら今頃夢の中かな。けど駄目だよブロンドのレイディ。彼女達にはまだやってもらわないといけないことがあるんだ」

「なんの話を……」

話が読めずに困惑する金髪に、男は優しくこう言った。

「君達にも手伝ってもらおうかな。何、悪いことなんて1つも無い

話さ。君達はただ、夢を見ているだけでいいんだからさ」

「……！！」

途端、空気が張り詰めた。

「やる気かい！？ 上等だ！！」

金髪ヘッドが臆せず飛び出す。

「ちよつとま」

俺の制止なんてあいつは聞いちゃいない。

「食らいなッ！」

金髪が男に向かって球状の何かを投げつけた。

「？」

男は軽く横に動いただけでそれをかわしたが、地面に当たって爆ぜたその玉の内容物は思いのほか派手に飛び散って

「！！」

男の靴と地面をくつつけた。

「……接着剤、だと？」

男の動きを止めた金髪はにやりと笑って男に拳を振るう。

「ッ」

一発、メキッと決まってしまった。

……意外といけるんじゃないね？

そう、思いかけたのもつかの間。

「！！」

奴の、動かせないはずの足がバリッと音を立てて剥がれたのが分かった。

そのままその脚は宙に上がる。

「危ない！！」

思わず両者の間に入る。

「ッ」

間もなく、容赦ない男の蹴りが腹に直撃。
その勢いで金髪を巻き込んでふつとばされた。

「ごふっ」

肺から空気がどつとこぼれる。

……あの野郎、本気で蹴りやがった。

「ちょ、ちよつと！ 大丈夫かい？」

「……へーきへーき」

「全然平気そうじゃないよ！ 顔色悪いじゃないか！」

確かにちよつと肋骨いつたかもしれないが、心配そうに声を掛ける金髪のほうこそ顔が蒼い。

蹴りひとつでここまで破壊力があるとは思わなかったのだろう。

「おや失敬。どうも加減が出来なくてね」

いけしゃあしゃあと奴は言うが、あれは絶対顔を殴られて一瞬本気で怒ったに違いない。多分そうだ。

「……ッ、やってくれるじゃないか」

金髪が再び立ち上がる。

が、その手は微かに、本当に微かに震えていた。

「君のほうこそ仕掛けまで用意して会いに来てくれたとは光栄だよ？ それに拳もなかなかだった」

男は殴られた頬をさすりつつ嗤った。

「けどそろそろ眠りの時間だね」

「!？」

次の瞬間、金髪ヘッドは前触れもなくその場に倒れた。

「な」

何をされたわけでもない。

ただ、奴と目を合わせたただけなのだ。

「姐様!？」

鉄パイプ女が金髪ヘッドを慌てて揺さぶるが、彼女は深い眠りに陥っているようで目を覚まさない。

「てめえッ！ 姐様に何をしたアッ!！」

冗談抜きに鬼のような形相で男を睨み付ける鉄パイプ。

「おっと、可愛い顔が台無しだよレイディ」

男はしれっとそう言って再びその視線を彼女と合わせた。
が、

「ああ、この手の娘は少し難しいな」

ものの数秒でふと残念そうにそうこぼした。

……あれってつまりあの怪しげな術はこの子には効かないってことだよな？

理由はともかく。

「おい鉄パイプ！ そいつ背負って外に出ろ！」

「ハア!？ 馬鹿言ってるじゃねーよ姐様の仇前にして尻尾巻いて逃げろってのか!？」

「その大事な姐様の安全が第一だろ!？ いいから外に出ろ!！」
「……ッ!」

俺の言葉に一応は納得したのか、鉄パイプ女は悔しげな形相のまま金髪ヘッドを抱え始めた。

半ばのろのろと、それでも外に出て行った2人を確認して、俺は

奴と向かい合う。

「おい。瑞葉はどこだ」

「瑞葉？ さてどの子だったかな」

「今朝乗り込んできただろ！！」

俺が声を荒げると、奴はああと納得したように頷いた。

「あの鬼の腕の子だね。上にいるよ。どうも堕ちるのに抵抗してるみたいで調教中だけだね」

……！？

「ちよ、なんだよそのちよ、調教つて！」

俺の頭が馬鹿なせいかもしれないがその言葉を聞いたらなんだかアブナイことしか思いつかない。

「知りたい？ だったら君にも特別、教えてあげようか」

「ッ、いらねーよこんちくしょー！！」

そのまま駆け出す。

俺は金髪みたいに小道具も何も用意してない。

ただ無防備に、馬鹿みたいに前に向かって走る。

「無駄なことを」

男は怖気ず堂々と立ったまま。

俺は拳を固めて

「！？」

奴の脇をかいくぐった。

一目散に階段を駆け上がって、2階へ上がる。

2階はまるでホテルのフロアのように似たような扉が並んでいた。瑞葉がどの部屋にいるかなんてわからない。

が、1つだけ扉が半開きになっている部屋があって、俺は何も考

えずにそこを目指した。

「瑞葉ッ！！」

部屋に入ると、そこには何か機械的なものの残骸と、その傍らで壁にもたれかかるように倒れている少女の姿が目に入った。

ここからじゃ顔は見えないがああのセミロングの髪は間違いなく瑞葉だった。

「瑞葉ッ」

彼女に駆け寄ろうとしたら

「そこまで、だ」

いつの間に追い越されたのか、俺の目の前に白いスーツのあの男が現れた。

「ッ」

ガシリと首元を掴まれる。

「彼女にはあの装置を壊された分、しっかり補ってもらわないと困るんだ。調教が終わるまで起こしてもらっては困るなあ」

「なに、を、おぎな……」

「言ってみれば生命力、かな。あちらの都合で女性のもの限定だったんだが、しかし君もなかなかいいものを持っていそうだ。試しに搾取してみたい」

次の瞬間、俺は目を見張った。

男の顔が、一瞬で変化したのだ。

いや、顔だけじゃない。腕も、身体も全部、女のものに。

妖艶な女は、その妖しい眼で俺を射抜いた。

「！！」

途端、がくんと崩れる身体。

意識が上に引き剥がされるように消えていく。

「　　良い夢を、坊や」
女は優しくそう言った。

E 4 - 4 : 特攻ホーントッドハウス（後書き）

なんか意識断絶で話が切れる話が多い気がするのは私の気のせいではないのでしょうか。

なんかまだ迷走してる感ありありますが更新頑張ります。

いつも読んでくださっている方々、ありがとうございます。

E 4 - 5 : 白昼ナイトメア

目を覚ますと、辺りはすっかり暗くなっていた。

「……あ、やべ」

まだ重い瞼をこする。

時刻はもう午後7時。

教室には当然、誰もいない。

昨日は徹夜だったから、日中眠気に耐えられなくて、結局教室掃除が終わった後からずっと自分の席で居眠っていたことになる。

ほとんど1日寝ていたというのにどうも頭がすっきりしない。

さつさと家に帰ってちゃんとベッドで寝よう。

そう思っただけに横にかかっている鞆に手をかけたその時

カラリと、教室の扉が開いた。

「あ」

暗い室内でも、入ってきた人物が誰なのか俺にはすぐ分かった。

「瑞葉？」

彼女は返事はせず、その代わりこちらに歩いてきて俺の前の席に座った。

「お前こんな時間まで寝てたわけ？」

頬杖をついて、呆れたように尋ねてくる。

彼女から話しかけてくるなんて、今日は機嫌がいいんだろうか？

「気付いたらこんな時間だった」

「授業中も散々居眠って怒られてたくせに」

「だって睡魔には勝てねーしさー」

「んな眠いなら学校休めよ」

「サボりはしないって月子先生との約束だから」

「？　んな教師いたか？」

「あ、中学のときの先生な」

「ふーん……」

会話がそこでなぜか途切れた。

なんとなくだが瑞葉の機嫌が悪くなった気がして俺は慌てて話題を替えた。

「瑞葉はなんでまだ学校にいるんだ？　お前部活入ってなかったよな？」

「いたら悪いかよ」

「……う。やっぱり機嫌悪い？」

俺なんかまずいこと言っただけかなー……

「　　ウソ」

「へ？」

「お前が起きるの待ってた」

彼女の不意打ち発言に、思わず胸が高鳴った。

「え、なん、でイッ？」

額に軽く手刀が飛んでくる。

「言わせるか？　フツー」

瑞葉の指先はそのまま俺の喉元まで下りた。

まるで喉元に銃口を突きつけられてるみたいな感覚。

けど覚えるのは恐怖じゃなくて、もっと別の、そう、どこか期待が入り混じった、そんな複雑な感情だった。

思わず喉が鳴ると、瑞葉はそれを見透かして艶やかに笑う。

そして、まるで猫でもじやらすように俺の喉をくすぐり始めた。

「あの、ちょ……」

困惑半分、気持ちよさ半分の声を上げる。

「ん？」

瑞葉は適当に流すだけで、手を動かすのをやめない。

そして、その指は着実に下に下がっていつて、
「ッ」

俺のウィークポイントである鎖骨に至った。

「お前ほんとに弱いのかな、ここ」

瑞葉はからかうように言う。

思わず目を瞑ってしまった自分が恥ずかしい。

「み、瑞葉だって弱いとこの1つや2つあるだろ！」

俺が躍起になって言い返すと、

「なら探してみるか？」

彼女はあくまで挑発的に、そう言い放った。

え。え。

探してみるかって……

「つてこら！ 何制服に手かけてんだ！」

目の前の光景を見て思わず眠気が吹っ飛んだ。

瑞葉が制服の上着を脱ぎ始めたのだ。

「だって服の上からじゃ分かりにくいだろ？」

さも当然とばかりに瑞葉はさつと上着を脱いで、さらに

「ちょ！ ちょっと待った！！」

白いシャツのボタンにまで手をかけ始めたので思わず彼女の手を
掴んで止めた。

……のだが

「！」

………や、わらかい……

つて！ 勢い余って胸タッチになってる場合じゃねーよー！

「な、なんか、変だぞ！ これ夢！？ 夢だろ！ そうだ！ 夢だ

「!!」

だとしたらこの変な状況に説明がつく。

「? お前何寝ぼけたこと……」

「寝ぼけてない!! 瑞葉はこんなことしない!!」

俺は掴んだ手を強引に引き上げた。

「っ」

そして、彼女の形をしたそれを睨む。

「お前、誰だよ」

眼を丸くしたそいつは、しばし動きを止めた。
そして。

「……………君も単純には堕ちないねえ」

目の前のそいつは、一瞬で顔を変えた。

白い服の妖艶な女 あの夢魔だ。

「仕方がない、君もしばらく調教してあげよう」

「!!」

今度は女が俺の腕を強く引いた。

想像以上の怪力になす術もなく転ばされる。

「ッ!!」

って馬乗りすんなこのふたなり悪魔が——!!

「さてどこから攻めようかな? 男性を相手にするのは実に久しぶりでなんだか心が躍るねえ」

勝手に踊ってんじゃねー!!

抵抗しようと拳を突き出すが、奴には避けられてもいないのに拳

が届かなかった。

「!？」

「無駄無駄。だってここは私が支配する夢の世界なんだよ？ 君の自由は最初から叶わない」

なんだと————!!

ちよつと待て！

じゃあなんだ！？ 俺はこんなところでこんな奴のいいようにされるのか！？

例え夢でもそんなの絶対嫌だ！！

……つて、ちよつと待て。

じゃあ、瑞葉も同じ状況なのか？

「……………」

……………あ、やばい。

目の前が真っ暗だ。

前にも、こんなことがあった。

神経が、視界にいかないんだ。

代わりに別のところに、エネルギーが回りはじめる。

『私の ……、だから』

触れさせるわけにはいかない。

侵させてはならない。

だって、俺は

『私が死ぬまで、私のものになってくれ。久城』

彼女と、そう、約束した。

「ッ！！」

手を伸ばす。

決して届かないはずの奴の喉もとに、今度はしっかりとそれは届いた。

「な」

女は苦悶の表情を見せる。

「ここがお前の支配する夢の世界ってのは嘘だよな」
逆に馬乗りになって、俺は吐き捨てた。

「ここは俺の夢の中で、お前はただの幻覚だ」

要するに、奴に攻撃が効かないなんていうのは、暗示だったんだ。

そう言った途端、辺りの景色は一転した。

* * *

「まさか、一般人に破られるとは思わなかったね」

そこは元の屋敷の一室。

目の前にはやや引きつった笑みを浮かべる妖艶な女が立っていた。

変な術は破った。

けど奴を仕留めるにはどうしたらいい？

「どうやって私を消そうかと考えているね？　しかし無理だよ君には。異形には異形を以って挑まなくては」

奴は俺の考えを見透かすように言った。

「確かに君は、ただの人間とは一線を画す何かを持っているようだが、何も知らなさ過ぎる。そんな状態でここに乗り込むのは自殺行為だと思わなかった？」

……何も言えない。

同じことを木村先生に言われたが、それを押し切ってここまで来たんだ。

「まあ、今更悔やんでも仕方のないことだろう。申し訳ないが君は口封じさせてもらうよ。私は少し余計なことを喋ってしまった」
女はそう嗤うと、ゆっくりと一歩、歩み出た。

殺気。殺気だ。

痛いというよりも、ヒヤリと冷たい静かな殺気。

奴は確実に俺を殺すつもりだ。

じり、と一歩足を引いた瞬間、奴の手が俺に向かって伸びて

「！！」

刹那、奴は横殴りに吹っ飛んだ。

「あ」

奴を容赦なく吹っ飛ばしたのは紛れもない異形の腕。
瑞葉だった。

派手に壁にぶつかった夢魔はきつ、と彼女をにらんだ。

「最近は暴力的な女が多いことで」

「黙れ淫乱。殴り殺すぞ」

……異形は異形を以って……殴り殺すのはアリなんだ？

そう考えている間に瑞葉は容赦なく腕を伸ばし奴の首を掴んだ。

「……ッ」

そのまま凶行に移るのかと思いきや

「答える。貴様は誰の命令で動いていた」

瑞葉は夢魔に、そんなことを問うた。

しかし奴は、嗤うだけ。

「……重要なのは、そこじゃない」

私にとっては、快楽に浸ることこそが、存在意義だったのだ。

それが夢魔の、最期の言葉だった。

* * *

「瑞葉、大丈夫だったか？」

俺の言葉に、彼女は『はあ？』とでも言いたげに怪訝な顔をした。

「お前こそ足手まといのくせに丸腰で乗り込んでくんこのマヌケ」

「丸腰で乗り込んでよく無事だったなって言いたいんだよな？」

「……！？」

瑞葉が目をぱちぱちしている。

何か俺、切り返し方を覚えてきたぞ。

……いや、思い出してきた、のか？

「なあ、瑞葉」

「んだよ」

「夢魔に変なことされなかったか？」

「！？」

「ごふッ！？」

「なんで俺が殴られる！？」

「いきなり変なこと訊くなこの変態ッ」

「し、心配して訊いただけだろ！　なんで変態呼ばわりされなきゃなんねーんだよ！」

「訊かれて私が一部始終をきめこまやかに答えるとも思ってたのかあア！？」

「……た、確かにそれは、ない、な。」

「……ん？　いや待てよ。その言い方だと。」

「……あつたのか、一部始終……」

「！？　あるわけないだろッ！　あんなちゃんな幻覚、すぐ偽物だつて分かったつっの！」

瑞葉にしてはなんだか妙に動揺している気がするが、まあ俺程度で見破れた幻覚だ。瑞葉に破れないことはないだろう。

「なあ、瑞葉」

「今度はなんだよしつこいな」

「いや、あのさ。俺、前にお前と……」

そう尋ねかけたその時。

「オオカミiiiiiiiiiiii！！」

そんな怒声と共に、金髪が部屋に入ってきた。

入ってきたかと思うとズカズカと俺ににじり寄る。

「！？　な、なんだよ！？」

金髪は、それこそ怒った顔だったが、さらに口を開こうとして急に躊躇いがちに伏目になった。

「な、なんだよ？　あの男なら瑞葉がやつつけてくれたからもう解

「決だぞ？」

「そ、その話じゃない！」

「？ だったら何の……」

「と！ とぼけたって無駄だよ！」

「？ ？」

「わ、私を口説いた責任！ とってもらっよ！！」

「……。」

「……。」

「………はいいいいいいいい！！？」

E 4 - 5 : 白昼ナイトメア (後書き)

そろそろ私も必死です色んな意味で。

このあたりから話を転がして行けたらなと思っております。

いつも読んでくださっている方々、ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8500t/>

イバラヒメ

2011年11月30日21時49分発行